


# 城ノ内探偵事務所



【お試し版】



# 城ノ内探偵事務所

著 ◆ 桂瀬衣緒  
絵 ◆ 烏 楽

城ノ内探偵事務所

本編

3

城ノ内探偵事務所

このファイルはサンプル版です。  
有料版「城ノ内探偵事務所」から  
続編「解放」と挿絵の大部分を除いた  
本編全文を収録しております。

## #Prologue

「どうも初めまして。当事務所所長の城ノ内です。どうぞ、かけてください」  
机の向こうで椅子に腰掛けた男が、にこやかに笑いながら着席を促す。

「はい、失礼致します」

五月のある晴れた日。私が訪れたのは郊外にある雑居ビルの一室。

応接スペースは別にあるようだったが、通されたのは部屋のと真ん中だった。

その事務所は陽当たりが悪く、真っ昼間であるにも関わらず薄暗い。おかげで窓を背にした相手と向き合っているだけでも、ほんのり後光が差している程度で特に眩しくはなかった。

所長と名乗ったその男をほんの数秒だけ観察する。見た目はずいぶん若い。年齢は二十八と聞いていたが、もう少し若く、いや、幼く見える。片側だけ掻き上げた髪型に、外見年齢を上げようという努力が見えるけれど、それでも十代と言ってもギリギリ通用してしまつくらい。

「えーと、園田あかりさん。年齢は二十三歳、と。……緊張してます？」

机に置かれた履歴書はたった今、私が渡したもの。そこに書かれた名前を読み上げ、男はちらりとこちらを流し見る。

その一瞬の視線に、すべてを見透かされているような錯覚を覚え、身体が跳ねた。

「っ、はい。少し」

少し？ どこが？ 心の中で自分が自分を嘲笑う。心臓の音がうるさい。

とっさに胸にやった手が震えているのに気付いて、思わず苦笑しそつになった時。

「別に、取って食いやしませんよ」

くすりと、目の前の男が笑った。

「……っ」

予想以上に子供っぽい笑い方。整った顔立ちも相まって、私の心臓は一度だけ、違う種類の音を立てた。

病的に見えるほどに白い肌。色素が薄いのか、髪も染めているわけではなさそうなのに真っ黒ではなく、わずかに茶色がかっている。美少年や美青年というよりは中性的な容姿。スカート穿いてカツラでも被ればそれだけで十分女の子に見えるだろう。

くすくすと笑う声が、緊張に拍車をかける。

踏み込んではいけないところへ来てしまったような気になってくる――

「で、いつから来られるんですか？」

「……えっ？」

突然の質問に、ハッと我に返る。思わず素っ頓狂な声が出て、また笑われた。

「採用すると言ってるんです。うちの事務員募集に応募してきたんでしょ？」

「え、でも、私まだ何も聞かれてませんが」

「経歴は履歴書もらったし。派遣で事務やってたんでしょ？　じゃあ問題ないよ。人となりは見りゃわかる」

「……はあ」

「僕は、あなたを信頼出来る人間と判断しました」

まっすぐにこちらの目を見て、そんなことを言う。何か問題ありますか？　と笑って。

その笑顔に、心の奥底がずきりと痛んだ。

——やめて。

「私はいつでも……明日からでも、今日からでも構いません。所長の指示に従います」

「んー、じゃあ明日からにしようか。片つけて机も用意しておくから」

不思議なくらい楽しそうな話し方に、はい、と短く答える。



「それから、僕の名前は名前と呼んでください。所長ではなくて」

「はい。えっと、城ノ内さん」

「ん、OK。僕と君しかいない事務所で所長とか呼ばれるの滑稽だと思うんだよね」

「そうですか？」

「うん。それに僕は堅苦しいの苦手だから。園田さんはそういうのきっちりしたいタイプ？」

いつの間にか、彼は口調を変えていた。親しみを込めて、——馴れ馴れしく。

自分より年上なのに、まるで弟のよう。

人懐っこいその笑顔が、誰からも愛されてきた人生を体現しているようで、少し息が苦しくなる。

「……………園田さん？」

名前を呼ばれ、またハッとする。

「あ、えっ、と」

取り繕うように、こちらも笑顔を作って。

——いけない。ちゃんとしないと。

あっさり採用が決まったとはいえ、彼と上手くやれなければ元も子もない。

「……………いいえ。出来れば名前で呼んでほしいです。苗字でなく、名前で」

私の回答にきょとんとした顔が、数秒かけてまた笑顔に変わる。今度は先ほどとはまた違う、困ったような笑い方だった。

「OK。なんかセクハラっぽいけど、本人が望むなら問題ないよね」

そんな彼の言葉を、沈黙のまま、笑顔で肯定する。

「ようこそ、城内探偵事務所へ。末永く、よろしく頼むね。あかりちゃん」

差し出された手を、握り返す。色々なものを振り払うように、精一杯力強く。

「はいー」

時間にしてコーヒー一杯分の世間話をした後、明日からの上司に見送られ、私は事務所を後にした。建物の外に出て、一度、事務所の窓を見上げる。

城内探偵事務所。

明日から私の職場になるその場所は、外から見てもやっぱり陽当たりが悪かった。

## #事務員

事務といっても色々ある。たったふたりの事務所で、新人に金勘定を任すことはないだろうという程度の予測はしていたが、正直一体何をするのか、さっぱり想像がつかなかった。

五月十四日、朝九時十五分。事務所の前に到着し、軽く深呼吸。

ノックは三回。どうぞーという、朝っぱらから間延びした声に導かれ、ドアを開けた。

「おはよう(い)げ(ご)ます」

「おはよう。あ、ごめん。暗いね。電気つけてくれる?」

「あ、はい」

振り返って照明のスイッチを入れながら、これが初めての仕事か、なんて少し笑ってみる。

「席はそこね。いくらふたりでもあんまり近いと息苦しいでしょ?」

彼はそう言って、自分の机から二メートルほど離れた机を指差した。

たったそれだけの距離でも、窓を背にした彼の席と比べると、こちらの席は確かに手元が薄暗い。

電気をつけさせたのは雇用主として正解だった。

鞆を傍らに置き、指示された場所に着席する。机の向きが九十度ずらしてあることもあり、まっす

ぐに前を向くと、彼は視界に入らない。目の前には、ただ一台のノートパソコンが鎮座していた。

「それで、私は何をすればいいんでしょう？」

「うーん、色々あるんだけどね。まずは……あかりちゃん、文書のレイアウトとか得意？」

「レイアウト？」

「そう。ビジネス文書とか、見やすいように体裁整える感じの」

「……まあ、人並みには出来ると思いますが」

「じゃあ悪いけど、このUSBの中身のテキストと画像、見やすいようにしてくれる？ 出来れば今

日中に」

何故か困ったような顔で笑いながら、彼がUSBメモリを手渡してくる。

「あと、今日は一時に依頼人が来る予定だから、来たらお茶出してあげてほしい」

「はい」

なんだ、簡単な仕事でよかった。ホッとしながら、ひとつめのテキストファイルを開く。

——それが、地獄の始まりだった。

\*

昼休憩も終わり、窓の外も午後の陽射しに変わってくる。相変わらず、照明は落とせないけれど。静かな部屋の中で、自分がキーを叩く音が断続的に響いていた。

まっすぐに、本当の真正面に頭を固定していれば見えることはなくとも、ほんのわずかも右を向けば見えてしまう位置関係。今は何よりそれが悔しい。いっその上司の席が自分の真後ろだったなら、悠々と携帯を眺めている彼の姿が視界に入って苛立つこともなかったろうに。

仕事なんだから仕方ない。そんなことはわかっている。

大所帯でもあるまいにわざわざ「事務員」を募集した理由も、なんとなくわかった。

「あかりちゃん？」

「何でしょうか」

パソコンの画面から目を離さないまま答える。その言葉が不機嫌なオーラを纏っているのに気付いたのか、彼は言いかけた本来の言葉を呑み込んだ。

「……コーヒー飲まない？」

「嫌いです。昨日は我慢して飲みましたけど」

「……じゃあ紅茶は？ この前茶葉もらったんだ。淹れるよ」

「それならいただきます」

「牛乳要る?」

「精神状態的には必要です。牛乳だけでもいくらかもしれません」

「……了解。牛乳多めで」

——ああ、駄目だ。イライラする。

テキストファイルの一行一行、文章を追うことに、腹のあたりに何か溜まっていく気がする。

十数分後、キッチンスペースのドアから上司が顔を出した頃、苛立ちは頂点に差し掛かっていた。

「城ノ内さん」

ミルクティの波打つカップをこちらに差し出してくれた上司へ、静かに声を掛ける。

「はいっ?」

非常に動揺した表情と、裏返った声が返ってきた。

「これはレイアウトの作業じゃありません。仕事の指示は正確な言葉をお願いします」

「……はい。えっと、……『原稿直し』ですか。ごめんなさい」

「原稿直し!? 暗号解読の間違いでしょう!! 何ですか『ちゅおsたいそうhな』って!」

「ああ、多分、『調査対象者』の打ち間違い、かな?」

「打ち間違いかな、じゃねえ! こんなのが何ヶ所あるんだよ!! 読みにくいところの話じゃないわ!! 携帯ばつかいじってるなら携帯で打て! そっちのほうが絶対マシだろうが——!!」

「め、名案だね。あかりちゃん? とりあえず落ち着いて?」

引きつった笑顔で、私の顔の前で下を指差す上司。

自分の視線がゆっくりと彼の指先を辿り、紅茶のカップに行き着くと同時、

「——」

我に返る。

自分が発した音が、耳に残っている。夢でも、気のせいでもない。

急速に、色んなところがしぼんでいく気がした。

——ああ、やっちゃった。

手が震える。まさか初日で本性さらけ出してしまうとは。

青ざめていく私に笑いかけて、上司は言った。

「まあ、飲んで。淹れ方は悪くないと思うんだけどね」

「……いただきます」

両手でカップを持ち、ふー、と静かに息を吹きかける。

——クビだな。仕方ないか。結局縁がなかったってことだね。

まあ、もつどうでもいいや。この事務所に来て、最初に最後の晚餐がこの紅茶。水面を眺めながら、ゆっくりとひとくち、のどに通す。

「……………」

チャイの淹れ方だろうか。確かに牛乳が多いし、甘い。でも、とても落ち着く味だった。

色々な感慨も混じってぼんやりしていると、傍らの椅子に腰掛けた上司も自分のカップに口を付けた。

「友達にももらったんだ。ダーズリンだって。紅茶は詳しくないんだけど、悪くないね」

「……はご」

「君の口にあってればいいんだけど」

今時珍しい壁のボンボン時計が、時を知らせる。依頼人が来ると言っていた時間だ。

時計をちらりと見やって、彼は一気に紅茶を飲み干す。猫舌で真似は出来ないけれど、私もあとひ



とくちだけ口に含み、カップを置いて立ち上がった。

「美味しかったですよ」

言いながら、先ほど彼が出入りしていたキッチンスペースを確認する。

せめて、お茶くみくらはは無難にこなしたい。——これが最後の仕事になるかもしれないだから。

「ごちそうさまでした。でも、これ多分ニルギリです」

そんな言葉に一瞬驚いた顔をして、

「へえ。じゃあ、友達に言っとくよ」

上司は笑いながら、ばさりと上着に腕を通した。

#家出人調査

息子を探してほしい、と、その婦人は言った。

「一ヶ月前に探すなというようなメモを残して居なくなったんですけど、どこにいるのかわからなくて。週一くらいでどうでもいいような連絡があるので、生きてるのは確かなんですけど……」

事務所内の一角、パーティションで囲っただけの応接スペース。

お茶を出して自席に引っ込むとした私を、上司が引き止めた。腕を掴まれ、視線とわずかな顎の動きで傍らの椅子に座るよう指示される。

「……………」

いや、別にいいけどさ。あの暗号解読今日中じゃなかったっけ？

「おそらく意図的でしょうね。敢えて定期的に連絡を入れている。ただの家出で特に事件に巻き込まれているわけじゃないなら、警察の動きは鈍いでしょうから。家出の前、息子さんと何かありました？」

「お恥ずかしいことですが、学校の成績のことで、少し叱りました。それがきっかけで、大喧嘩になりました。他の子と比べて小遣いが少ないことも不満だったようで……」

「なるほど」

軽く頷きながら、テーブルに置かれた写真を手に取る上司。

「お願います。まだ十七歳なんです」

憔悴した様子で、婦人が頭を下げる。

ここへ来るまで一ヶ月。今まで普通に生きてきた人にとって、探偵事務所なんて気軽に来られる場所じゃない。

もし自分だったら、と考える。親戚や友人関係、心当たりはすべてあたって、警察にだって足を運んで。おそらく、ここに来るのは最後の手段。

信用出来るのかどうかもわからない、探偵なんていう肩書きの胡散臭い相手に、ただ頭を下げ続ける姿に、心が痛む。その場に居るだけの立場上、顔を上げてくださいとも言えず、それでもはやく、何か声を掛けてあげてほしくて、私はちらりと隣の探偵を窺った。

「……っ」

そこにあったのは、目の前のつむじに對する、蔑むような笑み。

こちらの視線に気がつく、上司は質を変えた笑みをこちらに向け、そしてまた何事もなかったかのように、先ほどまでの営業スマイルで婦人に向き直る。

「吉岡さん、顔を上げてください」

不安げに体勢を元に戻す婦人をまっすぐに見据え、

「ひとつ、お聞きします」

口調はとても優しいのに、その声はどこか冷めた色をしていた。

「あなたは息子さんを連れ戻したいですか？ それとも息子さんに帰ってきてほしいですか？」

「え、……え？」

「言葉通りの意味です。前者なら、居所がわかれば報告します。連れ戻すなりなんなりご自由に。後者なら、自主的に帰るよう仕向けます」

「……そんなことが、出来るんですか」

「後者の場合も、居場所がわかった段階で同じく報告はします。でも、決して何もしないでください。約束出来ますか？」

彼の顔から笑みは消え、口調は強くなっていく。怖い、と思えるほど。

「着手金が十万。成功報酬が三十万の締めて四十万、ってところですかね。おそらく、それほど時間はかからないでしょう」

そんなセリフをあっさりと言い退けて、

「どうされますか？」

「……………あ、」

呆然と、探偵を見つめる依頼人。戸惑い、そして目の前にあるのが、希望なのか、それともそれ以外の何かなのか、測りかねている表情。

「吉岡さん？」

「え、あ……お、お願ひします」

うわずった返答。婦人は慌てたようにその場で鞆を開き、震える手で着手金を差し出してきた。私に受け取るよう顎で指示すると、上司は再度、営業スマイルを作る。

「承りました。どうぞご自宅で息子さんのお帰りをお待ちください」

\*

「……………はあ」

何度目かのため息に、上司が笑つ。

「どうしたの？ さっきから」

「なんだか疲れました」

「あはは、緊張した？ 駄目だよ、あれくらいで」

「だってなんか深刻すぎて」

私の言葉に上司が苦笑する。

「こんなどこに来る人はみんな深刻だよ。……ほとんどね」

「……そっか、そうですよね」

自分の考えが甘かったことに気付く。どんな人がここに辿りつくのか、先ほど考えたばかりだったのに。

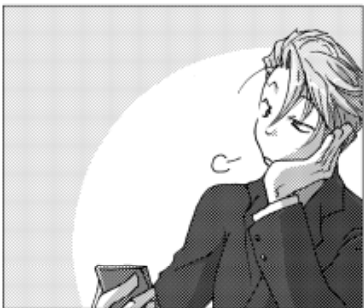
ここに居れば、他人の深刻な人生と、嫌でも向き合うことになるのだろう。——まあ、あくまでここに居ればの話だけれど。

「あかりちゃん、それ今日中に終わりそう？ 終わらなかつたら無理しなくていいよ？」

「いえ、終わらせませす」

せめて任せられた仕事くらいは終わらせないと、いくら一日でクビになった人間といっても、いったい何のために雇われたのかわからない。

「別に、明日でいいのに」



机に肘をついて顎をのせ、ポツリと零した上司のセリフは、狭い室内に、やけに響いた。

「……………あし、た？」

「うん。明日の夜に渡す予定だから、その報告書」

「いや、えっと、」

「ん？」

「……………私、明日も来ていいんですか？」

「えっ？ 来られないの？」

「いえ、そうじゃなくて」

「?..?」

私の言いたいことは理解不能らしく、肘をつくのをやめた彼は眉間に皺を寄せて首を傾げている。

「だって私、あんな醜態晒してしまって、その」

思わずうつむいてしまう。言葉が上手く出てこない。

「ああ！ って、え？ そんなこと気にしてるの？」

立ち上がり、こちらの席に近づいてくる上司の気配。

「…:…気にします」

「あんなのでクビにするわけじゃないでしょ。やっと来てくれた事務員さんなのに」

「初日でヒス起こすろくでもない事務員でも？」

事務椅子を少し回して、恐る恐る、彼を見上げた。

「まあ、あれは怖かったね」

冗談っぽく身を縮め、上司が笑う。それが恥ずかしくて、思わずまたうつむいてしまった。今この場に穴があったら泥水で満たされていようと喜んでダイブする、絶対。



「だから、これからは怒られないように注意するよ」

「……………」

優しい声とともに、後頭部に置かれた手の重みが、くしゃりとわずかに髪を乱す。

「ああ、ごめん。これもセクハラかな」

すぐさま離れていった手のひらの余韻を消すために、髪を直す振りして頭に手をやった。

再び顔を上げた私に上司がまた笑う。

「末永くよろしくって言ったでしょ？ もちろん、君が嫌なら別だけど」

「ごめんなさいとか、ありがとうとか、言わなきゃいけない言葉は一杯あるはずなのに、その時の私は、首を横に振るのが精一杯だった。

\*

五月十七日、午後二時十五分。

「あ、はい。少々お待ちくださいませ」

事務所の電話に出ると、相手は聞き覚えのある声だった。

「城ノ内さん、吉岡さんからお電話です」

「はいはい。思ったより早かったね」

そんなことを言いながらこちらに近づき、受話器を受け取ると、上司はにこやかに電話の向こうと話し始めた。

「……………」

思わず、上司の腰を叩く。軽く、一回。振り向いた上司は椅子に座った私が自分を睨み上げているのに気付いて、あっ、という顔をした。そして、片手で拝むような仕草をして、慌てて身体の位置を変える。

ひとつしかない電話機が私の机にあるため、上司の電話中は邪魔で仕方ない。机の向こう側に回ってくれば問題はないのに、と、毎回苦情を訴えているのだが今のところ最初から向こう側に行ってくれたことはなかった。

「ああ、はい。それはよかったです」

無事ノートパソコンの正面に戻ることが出来た私は、目の前の上司の会話を気にしつつも、報告書レイアウトの続きを始める。元になるテキストは、二日目の出勤時にもらったメールアドレスに上司

から送られてきたもの。

『あかりちゃんのアカウント取ったから、テキストはそこに送るね』

初日のヒスの原因は、私が口走った方法であっさりと解決された。携帯で入力されたテキストは前に比べれば格段に誤字が少なく、読みやすいものだった。いくら改行がいい加減でも、句読点がすっ飛んでいても、予測変換で漢字や接続詞がとんでもないものになっていても、アレと比べれば天と地の差だ。

「では、振込用紙を……え、来られるんですか？ 今日？ ああ、はい。構いませんが」

ちらりと上司を見る。どうやら、任務完了のようだ。

吉岡孝太の行方調査報告書、というよりは単に住所をふたつ並べただけの書類を作成したのは、五月十五日——つまり、吉岡夫人がこの事務所に来た翌日の朝のことだった。

朝、出勤した私に、携帯を眺めながら、上司は言った。

『あかりちゃん、吉岡さんの件でメール送ってるから。昨日の置いという、こっち先をお願い。すぐ出来ると思うから』

寝起きのようなぼんやりした口調で、あくびをしながら。開いたメールには住所がふたつ。住んで

いる場所と、働いている店の住所。おそらく年齢を偽って働いているのだろう。店名を見る限り、あまり健全ではなさそうだ。

『って、もうわかったんですか!? 昨日の今日で!』

大都会というほどではないにせよ、この街もそれなりに栄えてはいる。

人ひとり見つけ出すのはそう簡単ではないはずなのに、この短時間でやってのけたというのか。

『まあね。見たことある顔だったし』

驚く私に軽く笑い、上司は指示を追加した。

『あの奥さんちょっと心配だから、一切の行動を慎めって書いて。これからの計画邪魔されても困るから』

「ご家族の行動により任務が失敗に終わった場合、一切の責任は負えません。そんな一文が効いたのか、吉岡夫人は探偵の指示に素直に従ったらしい。

「はい、では、お待ちしております」

上司は受話器を置くと、今さら視線に気付いたのか、こちらに笑顔を向ける。

「近くに居るみたい。お金、これから持ってくるってや」

「……………はい」

「何か聞きたそうな顔してるね」

「はい、まあ」

「いいよ、聞いて。答えるかはわからないけど」

「じゃあ、遠慮無く」

「どうぞ」

「どうやって説得したんです？」

「説得？」

「吉岡さんの息子さんです。家に戻られたっていう電話だったんでしょう？」

「うん」

「家出少年って、どう言ったら素直に帰るのになって」

「……………説得なんかしてないんだよ」

「してない？」

私に話していいかどうか悩んだのか、少しの沈黙の後、上司は口を開いた。

「あかりちゃんさ。例えば自分だったら、家出して身分隠して働いててさ。ある時何故か周りの人に『家に帰れ』って言われるようになったらどう思う？ 同僚にも、事情も何も知らないはずの初対面の赤の他人からも同じこと言われるの。それもひとりやふたりじゃない、会う人会う人みんなから」  
「……………」

「僕なら気持ち悪くなって引きこもるかもね。でも、彼は引きこもろうにも同僚の家に居候してた。そりゃそうだよ。賃貸契約には住民票が要る。未成年なのはすぐにわかるし、未成年がひとりで契約なんてどこも受け入れてくれない。そもそも親から搜索願が出されてるかもしれないのに、のこの役所に住民票取りに行ったり出来るわけない。で、その同僚にももちろん例のセリフを言われてしまっ」

「……………」

「そ。帰ってくるしかなかったんだよ」

「……………」

「彼が早めに帰ってきてくれてよかった。もうちょっとしぶとかったら店長に全部バラしてクビしてもらっしかなかったからね。穏便に済んで万々歳だ」

「……………」

「呆れた？」

こちらの反応に苦笑しながら、上司が頭を掻く。

「いえ、そういうわけでは」

思わず首を小さく横に振る。

「でも、そんな芸当どうやって——」

言葉の途中、ドアの方からノックの音が聞こえてきた。

「はい。あかりちゃん、お茶お願い出来るかな？」

「あ、はい！」

慌ててキッチンスペースへ走る。その背中に声が掛けられた。

「先にその質問に答えとくよ」

「……え？」

振り返ると、上司はいつもの笑顔のまま、こう言った。

「企業秘密だけどね——あかりちゃん、僕は友達が多いんだよ」

## #真相

浮気調査に人探し、信用調査。小さな事務所の割りに、調査依頼はコンスタントに入ってきた。だからその違和感に気付くのに、それほど時間はかからなかった。

\*

五月二十日。初めてこの事務所を訪れてから一週間。報告書の作成も大分慣れてきた。上司のテキストは相変わらず、たまにフェイントのようなとんでもない間違いが潜んでいるから油断は出来ないけれど。

依頼の中で一番多いのは、意外にも従業員の素行調査だった。

「城内さん、この西原にしはらってどういう会社なんですか？」

「ん？ 別に普通の会社だよ。医薬品の卸関係だったかな？」

「……なんでこんなに素行調査が多いんです？」



そこまで大きな会社でもなさそうなのに、調査対象はこの一週間で三人。これから手を付ける報告書に記載する調査結果は二人とも、『サボリの常習犯』だった。

「まあ、お得意さんだから多少は安くしてあげてるけど、あんまり性質の良い会社じゃないのは確かだね」

「まさか、いつもこんな状態なんですか？」

「いや、今回はちょっとお祭りがあったから集中したんだろうね」

「お祭り？」

そんなものあったか？ 思わず眉を寄せる私に、上司が苦笑する。

「ぞ。パチンコ屋のね」

「……なるほど」

報告書を見返すと、確かに二人とも同じ日にパチンコ屋へ長時間居座っている。

「社長も大変ですね。こんなに不良社員ばかりだと」

「は、違う違う。あそここの社長はわざとそういうのばかり採用してるんだよ」

「あー」

「素行は悪いけど営業成績はそこそここの人間拾ってきて泳がせるの。サボリの証拠を掴んだら、ペナ

ルティの名目で給料は最低賃金まで引き下げ。職務怠慢の損害賠償と、うちの調査費用は問題の社員が借金として会社に返済していくことになる。おそらく調査費用も水増ししてるだろうけどね」

「……性質の悪さはどっちもどっちってことですか」

「まあね。生まれ変わったみたいに本当に真面目に働いてた人もいるけど」

「その場合は調査費用無駄ってことですか？ そんなリスク負ってまでよく……」

「他で取り返せるだろうし、元不良社員たちが頑張って業績も上がってるみたいだからそのくらいは痛くも痒くもないんじゃない？ それにあの社長、腐っても『西園』の遠縁らしいしね」

「……………あー、」

同族経営の会社が強いこの街にはいくつかの勢力がある。上司の口にした名前はそのうちのひとつ。——第二勢力『西園』。西原の名は聞いたことがないけれど、聞き慣れたその遠縁であるなら、金の使い方にも納得出来る。そして、その性質の悪さにも。

「ま、僕もあんまり関わりたくはないんだけどね」

「……いいんじゃないですか？ 仕事なんですから。仕事にもお金にも貴賤はありませんし」  
納得のいったところで、仕事に戻る。まあね、と、少し意外そうな顔で、上司が笑った。

\*

『五月十七日、午後二時二十分。調査対象者が「PC空間」入店』……住所は御影市林田三丁目十五番地……現場の写真は5番と』

調査対象者は西原の従業員のひとり。5番の写真には駅前のネットカフェが写っていた。看板に光が反射して店名が少し欠けている。パチンコ屋のイベント日以外は主にこの店で時間を過ごしていたらしい。

画像はすべて印刷でも印刷しているけれど、書類にもわかりやすく縮小して配置する。

『報告書見やすいつてお客さんに褒められたよ。人並みって言ってたけど、すごい上手だよ。レイアウト』

昨日言われたセリフを思い出す。あんな風に満足そうに礼を言われると悪い気はしない。

まだ一週間の新人に任せられることは少なく、レイアウトとお茶くみの他には電話の取り次ぎと買い出し程度。だから手の空いている時には、配る予定のない宣伝チラシを作ってみたり、特に必要もないのにコーヒーマーカーの使い方を可愛らしくまとめて貼ってみたり。

タイピングの粗さはともかくその他では人並み以上にパソコンを使える上司だったが、そういう能

力はからっきしらしく、いちいち感心してくれた。ちなみに、宣伝チラシは気に入ってもらえたらしく、口コミ用にと応接スペースへ配置されている。

——……あれ？

最初はその違和感が何から来ているのかわからなかった。

「……………」

テキストと画像。提供された素材をゆっくりと、もう一度見返す。

「…………この時間…………？」

午後二時二十分。その時間は確か——

「あ、何かおかしい？」

「城内さん、これなんですけど、この時間って、吉岡さんが来られた時間です。城内さん事務所に居ましたよね？」 日付か時間、間違ってるんじゃないですか？」

「あー、それね。気にしないで。間違ってるじゃないから」

「間違ってるないって……………」

疑いを持って、画像を見る。確かに昼間の写真だ。日付も時間も画像の右下に入っている。

「——！」

やっと、気付く。

ばさりと、今まで作った報告書のコピーを机に置く。わざわざ見なくとも覚えているのに、それでも確認したかった。

——やっぱり……！

なんで今まで気が付かなかった？　ここ一週間の調査報告書。私の関知しない夜ならともかく、昼の写真がこんなにある。——彼は、一歩もこの事務所から出ていないのに。

もう一度先ほどの写真を見る。

ブレもなく、くつきりときれいな写真。まるで写真のプロのように。

「……誰が撮ってるんです、この写真」

私の質問に、苦笑する上司。今頃気付いたの？　なんて声が聞こえるよう。

「友達。鳥景写真家の小森祐輔。知らない？　この街では結構有名なんだけどね」

「……こっちの写真は？」

写っている人物はハッキリわかるものの、先ほどの写真と比べればぼやけている別の日の写真を示

す。

「佐藤和也と水上恭子。近所の高校生」

「……………自分で尾行したことは？」

「ないね。上手くてできる自信もない」

「……………」

まあ、この人目立ちそうだから尾行しても駄目そうな気はするけども。けど、それにしてもだ——まさか事務所と関係ない人間にそんなことをさせているなんて。

他力本願もいいところじゃないか。こちらの呆れた顔に、上司はまた苦笑う。

「だから、友達が多いって言ったでしょ？」

——相容れない。

その表情に、私はただそう感じていた。

#.ペット捜索

午後三時。小さく、ドアが叩かれた。

「はぁい」

休憩しよう、と上司がキッチンスペースへ引っ込んだところだったので、事務所には自分しかない。慌ててドアに駆け寄る。

「……………」

開いたドアの向こうには、緊張した面持ちの小さな男の子がひとり。

「たんでいさんですか？」

「…………いや、私は違います」

少しがっかりしたような、ほっとしたような複雑な表情をした男の子は見たところ五歳くらい。幼稚園の制服に幼稚園の鞆。

私に探偵かと聞くくらいだから、上司の知り合いというわけではなさそうだ。

「どうしたの？ 探偵さんに何かご用？」

しゃがみ込んで視線を合わせ、努めて優しく問いかける。

涙を堪えるためか一度口をへの字に曲げて、絞り出すように彼は言った。

「……チャコをさがしてほしいんです」

「チャコ？」

首を傾げると、鞆の中から取り出した写真を渡された。映っているのは茶トラの子猫。

「おとといからかえってこないの」

「そっか。それは心配だね」

——ペット搜索の依頼？ 城ノ内さん出来るのかな。

とにかく、まずは親御さんに連絡したほうがいいだろう。

「お父さんかお母さんは？ ひとりで来たの？」

「うん」

「おうちの電話番号わかる？」

男の子が黙って首を振るのと同時、

「わかるよ」



頭の上から、声が降ってきた。

驚いて振り返る。いつの間にか真後ろに立っていた上司が、腕組みして笑いながらこちらを見下ろしていた。

思わず立ち上がって尋ねる。

「知ってる子なんですか?」

「いや。でも、見覚えはあるかな。三咲幼稚園の子だよね?」

優しい声の問いかけに、幼児は静かに頷いた。

先ほどの私と同様に、しゃがみ込んで上司は続ける。

「お名前言えるかな?」

「はやしゆうとです」

「ゆうとくんか。ちょっと待っててね」

彼の頭を軽く撫で、立ち上がって事務所へ戻る上司は、すれ違いざま、

「友達に先生居るから連絡取ってみるよ。キッチンにココア入れてあるから相手してて」

小さな声でそう言い、——そして最後まで、猫のことには言及しなかった。

\*

林悠人の母親がやって来たのはそれから一時間後だった。

上司がドアを開けると同時、顔を確認する間もなく、申し訳ありません！ と深く頭を下げる。

「どうぞ、そちらです」

「あ、おかあさん」

応接スペースから覗く顔に安堵の表情を見せた母親は、次いで、怒り顔を作って我が子に向き合った。

「なんでこんなところに居るの？ 心配したんだよ！」

いつもの時間に帰ってこず、幼稚園や友達の家で電話して探していたらしい。もう少し見つからなければ警察へ行くつもりだったと。

「ほら、帰るよ」

「おかあさん、チャコかえってこないの」

「……元氣ないと思ったら、それでここまで来たの？」

「そうみたいですね。探してほしいって言ってました。いなくなっちゃったんですか？」

世間話程度に聞いてみる。母親は、はい、と短く答え、

「あ、でも、うちで飼ってるわけじゃないんです。一ヶ月くらい前から近くの公園に住みついで、パンとかあげてみたいで」

慌ててそう付け加えた。言外をくみると、『だから搜索のお金は払えません』。セールスのつもりはなかったんだけど、彼女からしてみれば私も探偵事務所の人間だ。この反応は仕方ないのだろう。

「たんでいさん、おねがい。チャコをさがしてください」

悠人くんが、今度は上司に向かって懇願する。

「こら、何言って——」

母親が黙らせようとするのを制止し、

「悠人くん、それはお仕事のお話かな？」

微笑みを絶やさなまま、まっすぐに彼を見据えて、上司が問うた。

「うん」

「お仕事なら、お金が一杯いるよ?」

「ほくのおこづかいぜんぶあげます。おねがいます」

鞆の中を探り、差し出された小さな巾着袋。音だけで、中身は小銭ばかりだとわかった。

「ごめんね。全然足りないんだ」

優しい声で突きつける、冷たい現実。

「……………」

泣きそうな表情に、胸が痛くなる。

こんなに一生懸命なんだから、引き受けてあげればいいのに。あなたならお友達の力でどうにか出来るんじゃないのか。ついそう思ってしまっけれど、自制する。それは絶対に、口に出してはいけない言葉だ。

友達だろうがなんだろうが、彼は力を持っていて、私は持っていない。痛いほど自覚する。何も出来ないくせに、他人に対する要望だけは一丁前か。他力本願は自分のほうだ。

何も言えずに、ただこの沈黙が過ぎ去るのを待つ。

ずいぶん長く感じたけれど、それは多分、時間にしてほんの数秒。

「大丈夫、すぐ見つかるよ。もう少し自分で頑張ってください」

くすりと笑って、上司が悠人くんの頭を撫でた。

「お金で他人をあてにするのは最後の手段。行方を知りたいなら君にももっと出来ることがあるよ」

「ほくにもできることか？」

「猫探しのポスターなら、そのお金でも作れるんじゃないかな？」

その言葉で、彼の顔がパツと明るくなる。

「やってみる！」

「——」

今日初めて見るその笑顔に、私は思わず彼の母親と顔を見合わせる。

「ちなみに、」

つられるように笑いあっていると、不意に振り返った上司が手のひらでこちらを示した。

次の瞬間、

「——そこのお姉さんがそういうの得意なんだ」

私は、幼児の懇願と巾着袋の標的がこちらに移行したことを認識した。

\*

「おはよう。あかりちゃん、昨日林さん来たよ」

五月二十七日。休日明けの朝、上司からまず最初に言われたのはこんなセリフだった。

「お世話になりました、ってさ」

『どんな結果になっても受け入れること』

ポスターの完成時、上司は悠人くんを諭すようにそう言った。

事務所で埃を被っていたラミネーターを使わせてもらい、出来上がった一枚のポスター。

公園を中心に貼れ、という上司のアドバイスに従って、公園内部の掲示板と公園の入り口にあるコンビンに、許可を取って貼らせてもらった。

写真を加工し、なんとか自立つように作り上げたポスターは結構人の目を引いたらしい。

チャコの行方がわかったのは、ポスターを貼った翌々日のことだった。

連絡先は私の携帯。連絡をくれた人は三十代の女性だった。

探しているのが子供だと知ると、話かしたいと家に招かれた。彼女の家は公園のすぐ近く。

迎えに行くと、母親は急に用事が入ったらしく、大変申し訳ないけれど、と悠人くんを託された。

『大丈夫、すぐ見つかるよ』

——知ってたんだろうな、城ノ内さん。

「ごめんね、知らなかったの」

その家に、チャコは居た。通されたリビングで、柔らかいタオルに包まれ、小さな寢息を立てている。

高坂さなえと名乗ったその女性は、起こさないよう、静かにチャコに触れた。

彼女は、数年前に病気で仕事を辞め、欲しかった子供も出来なくなった。在宅で仕事はしているものの、旦那さん以外の人とは関わりもほとんどなく、どこかで寂しさを感じていたのかもしれない、と話した。

「この前の夜コンビニに行った時にね、ちょっと気晴らしに公園で缶ジュース飲んだの。そしたら、どこから出てきたのか、この子がね、足にすり寄ってきて、にゃあって鳴いたのよ」

微笑みをたたえたまま、愛おしそうに、その身体を撫でる。猫は起きてはいるのかもしれないが、目を開ける様子はなく、「ゴロゴロと気持ち良さそうにのどを鳴らしていた。

「首輪もしてなかったから、うちの子になる？　ってね。連れて帰ってきちゃった。ごめんね。ぼくの家の子だったんだね」

申し訳なさそうに、彼女が謝る。

「ううん。ぼくのうち、ねこかえないの」

少し悲しそうに首を振り、

「おばちゃん、チャコたいせつにしてくれる？　ぼく、またあいにきてもいい？」

まっすぐに投げかけた質問は、『結果』を受け入れた林悠人の決断だった。

目を丸くした後、高坂さんは、眩しいものを見るように目を細め、もちろん、と短く答えた。

「悠人くん、すっかり元通りで元気に公園駆け回ってるってや」

「そうですか。よかったです」

こちらも笑って答える。悠人くんも高坂さんもチャコも、みんな幸せな結末なら及第点だろう。



——おそろくすべて、彼の予想通りの結果たろうけど。

「全部知ってたんですね、城ノ内さん」

「まあ、高坂さんも友達だからね」

「それなら教えてあげればいいのに」

「僕のネットワークは商売道具だからね。安売りはしない主義なんだ」

本気なのか冗談なのか。彼はおどけたような仕草で笑った。

「それにこっちのほうが、達成感は味わえたでしょ？ あの子にはそれも必要なことだよ」

「はい、まあ、そうかもです」

「あ、でさ、これ」

思い出したようにそう言いながら、彼は棚の上に置かれた紙袋を手にした。

「はい、これは君の報酬」

「……?」

「受け取れないって言ったんだけど、君に渡してくれたって」

「あ……」

覗き込んだ紙袋の中には、大きな菓子折が納まっていた。

「気、使わせちゃいましたかね」

「ま、いいんじゃない？ 感謝してたよ」

なんだかくすぐったいような気分で紙袋を受け取ると、

「よく出来ました」

悠人くんで癖になったのか、上司が頭を撫でてきた。

「……十時になったら、これでお茶にしましょうか。紅茶でよければ、今日は私が淹れますよ」

「君の報酬なのに？」

「この重さですよ。ひとりじゃどのみち食べ切れませんよ」

「それじゃあ、ご相伴にあずかるうかな」

「はい。じゃあ今日も一日よろしくお願いします」

「ん、よろしくね」

上司の笑顔で、今日も一日が始まる。

相容れなさは消えないけれど、今までよりもうっすらだけ、彼を好きになれそうな気がしていた。

## #適性

昼休み明けの午後一番、ボールペンのインクが切れたため、ちょっと隣の建物にある文具屋に行っている間に電話が鳴ったらしい。事務所のドアを聞くと上司がまた私の机のど真ん前に立っていた。

いい加減、一回キレておいた方がいいんだろうか。

一瞬そんな考えが浮かんだが、今回は自分が居なかったんだから、さすがに許容すべきだと思いついた。まあ、私が事務所に戻って上司の真後ろに立った段階で気づいて退いてほしいと考えるくらいは警戒ではないと思うんだけど。

「ああ、はい。いえ、報告書は今日速達で発送する予定ですが。今日ですか？ わざわざ来ていただくなくても……はい、まあ……では十四時半に。お待ちしております」

私がまた彼の腰を叩くかどうかを悩む前に、上司は電話を置いてくれた。

珍しく疲れた様子のため息をつく。

「ああ、ごめん。また邪魔してたね」

「いえ。ボールペン買ってきましたよ。これ、レシートとお釣り。箱買いで備品棚に入れてありま

すのだ」

「ありがとう。ご苦労さま」

一旦自席へ戻り、受け取ったものを机に仕舞うと、

「……エアコンつけようか。人来るし、外暑かったでしょ？」

そう言って、彼は入り口へ向かった。

「はい。それ以前に、この部屋空気が淀んでますよ」

この事務所は陽当たりが悪いうえに風通しも悪く、窓を開けてもあまり風は入って来ない。昼を過ぎ、気温が上がりに始めてそろそろ不快の域に入りつつあった。

ドアの隣でかすかにパネルを操作する音が聞こえると、数秒のタイムラグの後、心地よい風が髪を撫で始めた。

異常に気づいたのは約十五分後。

「……あの、城ノ内さん」

「ん？ データおかしかった？」

「いや、そうじゃないんですけど……なんか寒くないですか？」

「……」

携帯を眺めたまま、彼が答える。気のない返事は来客に備えてずいぶん早く羽織った上着の力ゆえか。薄着で風の直撃を受ける部下の気持ちなどわかるまい。

「……設定温度上げていいですか？」

「たまらず立ち上がる。」

「いいよ。でもお客さん来るから消さないでね」

「わかりました」

さすがに消す気はなかった。またすぐに空気が淀むのが目に見えていたから。

「……うわ、十八度になってる」

近づいた先には『事務所』とテプラの貼られた操作パネル。そりゃ寒いわけだ、とひとり納得し、上向き三角の表示がついたボタンを連打した。

「……あれ？」

「ん？ どうかした？」

「温度が上がらないんです」

「もうちょい強く押してみて。最近反応悪いんだよね」

「……んー」

「……駄目？」

「はー」

「ちょっと貸して」

こちらに近づきながら、彼が言う。その言葉に従って壁に固定された操作パネルから離れると、上司は、ぎゅう、と効果音が付きそつなほど強くボタンを押した。

「……うーん」

「駄目みたいですね」

珍しくむくれた顔で、何度か圧迫を繰り返した上司は、どうしても温度が変わらないことを確認するど、ひとつため息をついた。

「ごめん、あかりちゃん。……今日のところは我慢してくれる？ 修理手配しとくから」

「はい。まあ、仕方ないですね」

「……机移動できないし、困ったね」

電話線と電源の都合上、机の移動は難しい。いや、もちろん移動することは可能だが、理由が一時的なエアコン故障では、それだけの労力を使う気力は湧かなかった。

「まあ、あったかいお茶でも飲んで我慢しますよ」

「あ、いや、ちょっと待ってね。確か……」

「はい？」

パタパタと小走りでキッチンスペースへ駆け込む上司を目で追つ。開け放たれたドアからほんのわずか、生ぬるい空気がなだれ込んできて、私は初めて、耐えきれなくなったらそっちに逃げればいいんだ、と気付いた。

ガサゴソと音はするものの、上司の姿は見えない。そういえば、キッチンの奥にもつひとつドアがあったような……？ 自分のおぼろげな記憶を確かめるために、ひょいと音のするほうを覗き込んだ。

記憶は正しかったらしく、ドアの向こうの見知らぬ空間から何かを抱えて出てきた上司と目が合った。

「あったあった。あかりちゃん、これ」

いつもの懐っこい笑顔でその何かを渡される。

「……カーディガン？」

それは、クリーニング上がりのビニールに包まれた黒い男もののカーディガン。

「僕のだからあかりちゃんには大きいだろうけどね。気に入らないかもだけど、風邪引くよりマシでしょ？ あとこれも。こっちはなんかのノベルティだったやつだから安っぽいけど」

「……じゃあ、お借りします」

もうひとつ押し付けられたストールを傍らに置き、カーディガンに手を通す。もともとゆったりサイスらしく、袖はやっぱりかなり余った。丈も尻まで完全に隠れる状態で、温度調節としてはちょうどいいけれど、服に着られている、というのはこっぴどいことを言っつんじゃないだろうか。

「……」

同じことを考えているのか、上司を見ると、ずいぶん複雑な顔で苦笑していた。

\*



「ところであかりちゃん、……ちょっと質問いいかな？」

自席に戻った上司は、一度手にした携帯を、意を決したように机に置くと、何故かとても言いづらそうに口を開いた。その様子に違和感を覚え、何か深刻な話なのかと、パソコンから目を離して向き直る。

「どうぞ？　なんですか、改まって」

「あかりちゃんてさ、……あー、えっと、……彼氏とかいる？」

「……………は？」

想定外の質問だった。思いっきり顔を歪めた私に、上司が慌てたように付け加える。

「いや！　あの、変な意味じゃなくて。業務上必要な確認というかなんというか……」

「……………なんですか、それ」

「あー……………はは、答えたくなかったらいいよ、ごめん」

「……………別に構いませんけど」

業務上必要というのがよくわからないが、まあ、ここまで言いづらそうにしているんだから、単なる興味本位というわけでもないんだろう。

先ほどのストーリーをひざ掛け代わりに足にのせながら、努めて冷静に答える。

「そう呼べるような人は今のところ居ませんね」

「結婚願望とかあるほう？」

「んー、そうですね。……夢みたことは、ありました。でも」

答えながら、純粹だった頃に思いを馳せる。それほど前ではないはずなのに、今となっては遠い昔のよう。

「今はそれもないですね」

「……そか。若いのもったいない。でも、ま、それならよかった」

ひとり頷きながらの返答に、ほんの一瞬、腹の奥底が沸き立った。

「……なんなんですか、さっきから」

苛立ちを込めて問う。上司にとっては意味のある質問なのかもしれないが、こちらにとっては蚊帳の外のように、これが不愉快以外のなんだというのか。

「ごめんね。実は、ちょっと手伝ってほしいことがあってね」

「……手伝い？」

「うん。まあ、特に何もしくなくていいんだけどね。黙って僕の側に居てくれたらそれでいいから」  
そう言って、彼は人差し指を自分の口もとに添える。その仕草で、私は、彼の言う『黙って』が『文句を言わずに』の意味ではなく、文字通り『言葉を発さずに』の意味だと理解した。一応、拒否権は確保してくれているらしいが、特に断る理由も見つからない。

「はあ。まあ、いいですけど。今日は報告書も簡単なものばかりです」

「ありがとうございます」

こちらに笑顔を向けて短く礼を言つと、ちらりと時計に目をやる。一瞬の視線の冷たさと、また吐き出されるため息。

『わざわざ来ていたかなくても』

電話の時の言葉を思い出す。とつやら今日の来訪者は彼にとってよっぽど会いたくない人物らしい。

重い腰を上げ、壁に掛けられた鏡の前に立つ上司の手には、カーディガンと一緒に持ってきたのか、深い青色のネクタイ。

「珍しいですね。誰が来られるんですか?」

面接の時も、今までの来客の時も、上司がネクタイをしているのを見たことはなかった。いつもはラフな襟元が、意外にも慣れた手つきで引き締まっていく。

「……………来たらわかるよ」

「まあ、別にいいですけどね。誰でも」

もしかして、よっぽど偉い人なんだろうか。

## 井浮気調査

午後二時半。入り口のドアから聞こえてきたのは、女性の声だった。

「急にごめんなさいねえ」

「いらっしやいませ。わざわざ」足労いただきありがとうございます」

仕事前の笑顔で応接スペースに誘導すると、すぐさま事務所に戻ってきた上司は、こちらに向かって大きく手招きする。

応接スペースは事務所の片隅を高めのパティションで区切っただけのもの。小声ならともかく普通に話していれば向こうにもある程度は聞こえてしまう。

声を出すなど言われたので、とりあえず頷いて返答にする。

——あ、お茶出さなきゃ。

キッチンスペースへ向かおうとする私の腕を、慌てて上司が後ろから掴んだ。低い声が耳元で囁く。

「いい。いらなにかしら」

「……？　はむ」

「それより早くこっち来て」

応接のほうがかいからと、自席に置いていたストールを被せられ、珍しく笑顔のない上司に手を引かれる。

——なんだ？　なんか焦ってる？

不思議に思いながら応接スペースに着くと、視線と顎で促され、脇に腰掛けた。

気付かれないよう、依頼人のほうを窺う。三十代後半のまだ見たことのない女性。

派手目の顔立ちだが、とても綺麗な人だった。大きく胸の開いた薄手のワンピースが今この場ではただ寒そうに見える。

これが、「招かれざる客」？　特にマナーに敵しそうにも見えない。

「藤井さん。早速ですが、こちらが報告書になります」

「見ていいかしら？」

「はい」

静かに、彼女が封筒を手取る。昨日、私が作った浮気調査報告書だった。調査対象者は藤井豊。ということは、この女性はその妻である藤井直美夫人なのだろう。

「……………」

食い入るように書類に目を通す夫人のその手が震えている。

「残念ですが、ご主人は同じ会社の女性とお付き合いをされているようです」

「そつ、ですか」

書類を手から放すと、ポロポロと涙をこぼし始める藤井夫人。

哀れなその姿に、

「……………」

何故だろう。何か、違和感を覚える。

まるでひとつひとつの仕草や感情を大げさに演じているような、そんな印象。

「ありがとうございます。離婚の決心ができました」

口元を押さえて、伏し目かちこ。

それでいて、私の存在が気になるらしく、こちらにもちらちらと視線を寄す。

「そつですか。これからの人生に幸多きことを祈っております。傷心のところ申し訳ございませんが、こ

ちらが請求書になります」

「じゃあ、また持ってきます」

「いえ、振込用紙を付けておりますのでわざわざお越しいただかなくても結構ですよ。山崎町の「ご自宅か

ら」ここへ来るのは大変でしょう？」

営業用の微笑みを絶やさずに、あくまで事務的に対応する上司にも違和感があった。

やっぱりものすごく嫌がっている。まあ、その理由はなんとなくわかってきた。

ただ黙って隣にいただけでいい。それはつまり、私の存在自体が牽制になることを期待しての命令だ。残念ながらそこまでの効果はなかったらしいけれど。

命令通り何も言わず、上司をちらりと流し見る。そろそろ笑顔を保つのが限界に来ている。

「いいえ。城ノ内さん、あなたに会いたいです」

——一瞬。

聞きたくないセリフで思いつきり険しくなった上司の顔を、私はきっと一生忘れない。

「からかわないでください」

笑顔に戻り、今のセリフを冗談にしようと思死の抵抗を試みるけれど、

「本気ですよ」

そんな努力が通じるはずもなく、彼女は上目遣いで、机の上の彼の手を撫でた。



「——っ」

——なんだこの攻防。

牽制どころか、蚊帳の外からひとり見物してる状態じゃないか。

いや、実は牽制になってるのか？ 私がここにいなければ、強引に押し倒されたりするんだろっつか。助け船を出してやりたい気もするが、しゃべるなど言われているし、そもそも事を荒立てずにどうやって助ければいいのかもわからない。なにせ支払い前のお客様だ。機嫌を損ねるのは避けたい。

どうしようかと考えを巡らせていると、唐突に、——彼の顔から表情が消えた。

——あ、切れた。

何故かそんな風に直感した。キャパシティーオーバーだ。今確かに、彼は何かを振り切った。

何かが起こる予感に、息を呑む。

上司は一度目を閉じると、またゆっくりとまぶたを開いた。

「——あかり、下がってなさい」

その声は限りなく優しく、そして限りなく冷たく響く。

いつもと違う呼び方に、思わずビクッとしてしまっ。

動揺を押し殺して、とにかく黙ったまま一礼し、応接スペースを後にした。

張り詰めていたのか、パーティションの裏側に立った瞬間、脱力感に襲われる。

カーディガンはもちろんその上からストールまで羽織っていたのに、思った以上に手足が冷えている。藤井夫人はあの格好でなんであんなに平気な顔でいられるんだと不思議に思うくらいに。

考えてみれば、茶を出さなかったのは儀礼的な歓迎の意を表さないこと以外に、暖を取らせないためでもあったのかもしれない。

「……………」

いきなり解放されたのは何故だったんだろう。結局役に立たないことがわかってお役御免になったということか。なんだか申し訳ない気分になる。

それにしてもどうするつもりだろう。まさか黙って襲われる覚悟をしたわけじゃないだろうけど。

思わず、パーティションの向こうに耳を澄ます。

おそらく私の足音が聞こえなくなったのを確認したのだろう。上司が沈黙を破る。

『失礼。不倫のお誘いは光栄ですが、身重の妻の前でしたい話ではありませんので』

壁越しで多少くぐもってはいたものの、その言葉ははっきりと私の耳に届いた。

『……………』

いつもの笑顔が目に浮かぶような柔らかな声。優しい優しいその口調で、

——今、なんて言った？

『えっ!? 奥様なんですか!? 嘘、だって、この前は居なかったのに』

信じられない、というように彼女が声を上げる。

安心してください、ここにも信じられない人間がひとりいますから。

『数日前から手伝わってもらってるんです。安定期に入ったので』

流暢に、どこまでも流暢に、一片の淀みもなく彼は答える。

『とは言え、申し訳ありません。あまり長くはひとりしておけないんです。妻はすぐに無理をするので』

『…………え、ええ、じゃあ、私おいとましますわ』

呆然とした声と、双方が立ち上がる衣擦れの音。

『お支払いは振込で結構ですから』

『え、ああ、そうですね。そうします』

『ありがとうございます。気を付けてお帰りください』

笑顔で彼女を見送り事務所に戻ってきた上司は、パーティションの影で固まっている私に気が付いた。

「……あー、あかりちゃん？」

「はい」

「もしかして、聞きちゃった？」

「はい」

「……………ごめんなさい」

「~~~~~っ、全部っ、この服渡したときからそのつもりだったんでしょう！」

サイスの合っていない服を着て、さらにストールまで羽織ってれば、実際の体型なんてわからない。つまり、この件は最初から全部計画済みだったのだ。

顔が真っ赤なのが自分でわかる。握りしめた拳は震えが止まらなかった。

涙を堪えた抗議の表情に、ハツの悪そうな顔をして、

「うん、まあ」

目をそらして頬を掻いた上司は、短く肯定の言葉を口にした。

「っ、言ってくれば、協力くらいしたのに……!」

「いや、だって、内容が内容だし、あかりちゃん嫌がるかなって」

「どっちみち嫌なことするなら教えてほしいです!!」

「ごめんって。これからはちゃんと相談するから」

「当たり前……って、ちょっと待って。これからもあるんですか?」

「多分。たまに居るんだよね、ああいうお客さん」

「……付き合ってあげたらいいじゃないですか。離婚するって言ってたし、藤井さん美人でしたよ」

腹いせのように嫌みを言っていると、うんざりした表情で彼は答えた。

「旦那の浮気で傷心の私に優しくしてーってだけならまだいいんだけどね。ああいうタイプは自分の浮気を棚に上げてる場合がほとんどだよ。あの人は旦那の他に三人いるんだけどね」

——世の中って、こんなに狂ってるのか。

啞然とする私に、上司が苦笑する。

「お茶にしようか。僕が淹れるから」

「あ、今日は私がやります。この部屋寒いので一旦出たいです」

じゃあ一緒にやろっか、と連れだってキッチンスペースへ移動した。

上司が紅茶を淹れている間、茶菓子を用意する。

戸棚の一番端っこに焼き菓子の詰め合わせの箱がある。この前、林さんからもらったものだ。クッキーとパウンドケーキをいくつか取り出して皿に載せたその時。

「……………あれ？」

「どうかした？ あかりちゃん」

目に入ったのは、このキッチンスペースにあるエアコンの操作パネル。

「事務所の操作パネルって——」

それは入り口ドアのすぐ隣にある。毎日目には入っているけれど、触れたのは今日が初めてだった。だから、違和感を覚えても、そんなものかと思っていた。

「——前からテプラって貼ってありましたっけ？」

「あかりちゃんさ、結婚願望ないって言ってたけど、」

笑ったまま、彼は私の質問をさらりと聞き流す。陶器のポットにたった今沸いたばかりの熱湯を注ぎながら。

「まさか、」

事務所へのドアを開け、入り口へ走る。目的はもちろん、操作パネル。

それに貼られた真新しいテプラに爪を立てる。

考えてみればおかしいじゃないか。

それほど広くもないこの事務所。ひとつしかない操作パネルに、どうして『事務所』なんて貼る必要があったのか——

ペリッと音を立て、剥がれたその下に現れた文字は——『集中管理中』。

「———」

集中管理機能のあるエアコンの子機に表示される文字。

これが表示されているということはおそらくキッチンスペースにあるものが親機だ。

反応が悪いんじゃない。温度設定はここでは変更出来ないようにしてあったんだ——

計画の始まりは、服を渡した時じゃない。本当はもう一段階前。エアコンの電源を入れた時から、既に始まっていたのだ。

「もし結婚するときは気をつけて。——結構騙されやすいから」

かくして私は、この事務所に所属して二回目のヒステリーを起こすことになる。



#友人

藤井夫人の一件から一夜。

さすがにあれだけ喧嘩を売られたあとにその本人からなだめられてもそう簡単に機嫌は直らず、昨日はむすっとしたまま過こしてしまった。上手くやらないといけないのはわかっているけど、どうにもおさまりがつかない。

午前九時十五分。切り替えきれずにもやもやを抱えたまま、私は事務所のドアの前にいた。

「……ん？」

ドアノブをひねると、妙な抵抗。

——……鍵？ 城ノ内さんまだ来てないのか。

「っと、どこ入れたっけ」

鞆の中から鍵を探し出す。

『あなたを信頼出来る人間と判断しました』

あのセリフは本気だったらしく、初日の帰り際、今となっては見慣れた笑顔で渡された合鍵。それは信頼という名の枷でもあり、複雑な気分になったものの、幸い上司は私より早く来て遅く帰るので使ったこ

とはなかった。

なんとなく緊張しながら鍵を回す。カチャリと小さく、無機質な音がした。

「……おはようございます」

誰もいない事務所に、小さく小さく挨拶する。当然返事は返ってこない。その代わり、湿っぽく淀んだ空気が私を出迎えた。

今日はまた暑くなると天気予報で言っていたのを思い出しながら、エアコンの電源を入れる。パネルを見た瞬間、昨日の嫌な記憶に眉間が反応して、落ち着け、と自分をなだめた。

風が髪をかすめていくのを感じてから、自分の椅子に引っ掛けてあったカーディガンに腕を通す。

設定温度を上げても風が当たるのは変わりなく、結局カーディガンは借りたままになっていた。

自分で服を持ってこなかったのは、事務所内では必要ないことと、上司への嫌みを込めて。そして正直、いくらサイズが合わなかつと、嫌な思い出があろうと、商店街で九八十円のたき売り商品より、高級ブランドタグの付いたカシミヤのホールガーメントのほうが着心地が良かったのだ。……ちっ、金持ちめ。

「……なんか、違和感あるなあ」

パソコンを立ち上げながら、思わず苦笑する。窓際の席にいつもいる人がいない。ただそれだけの違いなのに、まるで違う場所のようだった。

まずはメールを確認。上司から二件のメールが来ていた。最後の受信時刻は四時十三分。彼の仕事のやり方は未だ色々と謎に包まれているが、なんだかんだでよく働いているようだ。

「……なんだこりゃ」

なんとなく最後のメールを開くと、思わずそんな呟きが漏れた。予測変換のオンパレードなのか、言葉と言葉の繋がりがすごい状態になっている。どうやらさすがの上司も眠かったらしい。

以前の暗号を彷彿とさせるが、日本語であるだけマシか。なんとなく大筋は読み取れた。

——これは城ノ内さんが来てからにしよう。

まずは、昨日の続きから手を付けた。

「……………」

が、キーボードを叩き始めても、なんだか落ち着かない。

「……紅茶でも淹れようかな」

静かなほうが集中出来ないなんて不思議なものだ。独り言が多いなあ、なんて、自分でツツコミを入れながら、キッチンスペースへ向かった。

そこで見つけたのは、誰かの足。

「——っ、」

一瞬、身体が跳ねた。

キッチンスペースの奥の部屋。中途半端に開いたドアの影から、ソファに乗った足が見えていた。もちろん、血まみれになった死体の一部なんぞではなく、生きた人間にくっついた状態での発見だ。

中を覗き込むと、狭いからか事務所よりさらに薄暗い。物置兼仮眠室といったところか。物の溢れかえった中にギリギリ横になれるくらいのソファ。そしてその上で、上司が安らかな寝息を立てていた。

「……なんだ。居たのか」

眠りは深いようで、こちらの呟きにもまったくの無反応だった。

「……………」

ふと湧き上がったその衝動を無理矢理抑えつけて、小さく深呼吸。

\*

「……城ノ内さん、起きてください。もう朝ですよ」

無反応。

「城ノ内さん、起きてくださいってば」

無反応。

「起きないとなつても知りませんよ?」

無反応。

頼むから早く起きて。——この衝動を抑えきれなくなる前に。

「……城ノ内さん?」

呼びかけながら、彼の額に手をやる。無反応な彼の代わりに、さらりと前髪が私の指を撫でた。

起きるときよりさらに幼い、子供みたいな寝顔。穏やかで無防備なその寝顔——

「……っ」

息が詰まる。自分の心臓が耳元へ来たみたいになるさい。

もう一度、前髪に指を絡ませる。

——何、しつうとしてるんだ。

息を殺して、ほんの少しだけ汗ばんだその額に触れた。

まだ、反応はない。自分を止めるきっかけが欲しいのに、阻んでくれるものは何も無い。

「……………」

額の指はそのままに、もっ片方の手で、ポケットの水性サインペンを取り出す。

ああ、せめてここにあるのが油性ペンだったなら、もう少し良心が咎めてくれただろうに！  
自分で自分を止められない。とにかく昨日の腹いせがしたくて仕方ない。

震える手で、ペン先を彼の額に向ける。

肉とか書いたら、城ノ内さん、さすがに怒るだろうか？

復讐の刃が彼の額に届く寸前 だった。

「……………」

突然、彼の枕元で起こった振動音に、我に返る。

携帯の着信。マナーモードになっているのか、バイブのみで着信音は流れなかった。

「……………」  
『徹』？

画面上に表示されている名前を読み上げる。『友達』のひとりだろうか。

「城ノ内さん、お電話ですよー」

声を掛けても、手を叩いてみても、上司の肩を叩いてみても、揺さぶってみても。そこまでやっても彼は起きる気配すらなく、三十秒後、振動音は途切れた。

「……………」

お手上げた。諦めよう。そのうち起きてくるだろうと、ティバッグの紅茶を淹れて一旦自席へ戻った。  
が。

——気になる。

振動が止むことはなく、一分と空けずに着信は続いた。

音は出ていなくても、振動が気になって仕方ない。

「もう、うっとうしいなあ」

再び眠り姫もとい上司の元へ戻り、電話に出てみることにする。

部屋に戻ると狭い空間だから余計なのか、事務所で聞くのと比べて振動音はずいぶん大きい。

「脳の異常とかじゃないよな、これ」

相変わらず無反応の上司に、ふと恐ろしい想像が頭をよぎる。振り払うように、振動する携帯に手を伸ばした。

「……は？」

客の可能性もあるから、下手なことは言えない。ただ名乗るだけでも、万一、藤井夫人のような相手だった場合にややこしいことになりそうだ。まあ、名前からすると男性らしいが、関係者である可能性も否定出来ないわけだし。

『紘？』

「はい？」

『あれ？ これ、……えっと、城ノ内の携帯じゃないですか？』

「ああ、はい。そうです。今ちょっと本人が出られないので、代理で出させていただきます」

『あ……、ひょっとして、紘、寝てます？』

ラフな話し方。どうやら仕事の依頼人ではなさそうだ。

『よく存じで。さっきから起こしてるんですけど、全然で』

『やっぱり。……おい、直樹。お前が飲ませっからだぞ』

どうやらもつひとり居るらしい。『徹』とやらがもつひとりに語りかけると、低い笑い声が向こう側で



響いた。相変わらず弱えなあ、と。

「ああ、昨日一緒に一緒だったんですか？」

『はい。と言ってもそいつが居たの三十分だけですけど。ちゃんと帰れたかちょっと心配だったもんで』  
三十分。それで帰りの心配をされるって、城ノ内さんそんなに弱いのか。衝撃の事実を知ると同時、例の破壊的テキストにも納得がいった。

「残念ながら、家には帰ってませんね」

『あ………そつですか。すみません。多分、もつそろそろ起きると思うんです。ところで、えっと、どちら様？ あ、こっちは城ノ内の友人なんですけど』

「私は部下です」

『ああ、もしかして噂のあかりちゃん？』

「……はい」

噂ってなんだ。飲み会で何を話した城ノ内。

わずかな間でこちらの思いをある程度把握したのか、『徹』は続ける。

『君のこと珍しく気に入ってるみたい。彼女でも出来たのかと思っただくらい楽しそうな話し方だったか』

顔も知らないのに、ニヤニヤと笑っている様子が目に浮かぶよつな、そんな話し方。

少し、苛立つ。この電話の相手にも、先ほどの予言通りわずかな日光で眉間に皺を寄せ始めた傍りの上司にも。

もう、声は届くだろうか。

「……まあ、そつですな」

『……へ？』

「あかりちゃん……？ あれ、今、何時？」

「ある意味恋人以上かもしれません」

「俺の携帯？ ……誰から？」

寝ぼけ眼で身を起こす上司を見下ろして、にっこりと笑ってやる。

「一度、孕まされたから」

「——！！ ちよつ、」

気付け薬としては最高だったらしく、一気に顔色が変わると同時、彼は私の手から乱暴に携帯を奪い取

った。

「もしもし!? 徹か! 嘘だからな今の!!」

焦る上司の耳元から、ガラガラと大笑いする声が漏れた。彼は笑い声に対して一通り弁解すると、何故か再び、非常に嫌そうに、こちらへ携帯を差し出してきた。

「……代わって」

余計なこと言わないでよ。そんな思いが滲み出たようなじっとりとした視線。対照的なくらいの笑顔で受け取ってやる。

『君面白いねー! そりゃ絃のお気に入りになるよ』

電話の向こうの笑い声の中、そんなお褒めの言葉を頂いた。

『俺が言つのもなんだけど、仲良くしてやって。そいつ——』

「……はい、それじゃ代わりますね」

ひとことふたことこの挨拶を交わし、携帯を返却する。ホツとしたような顔でそれを受け取り、私に背中を向けて、上司は電話を切った。

ゆっくりとこちらを振り返った彼に、舌を出してやる。

「あかりちゃん、本っ当、勘弁して」

「何がです?」

「女の子がなんてこと言っの、まったく」

「男の子なら言ってもいいと?」

「……………昨日のこと、まだ怒ってる?」

「怒ってるというよりは、気持ちがおさまらない感じですよ。どうすればいいのか、自分でもわかりません。

まあ、今のでちょっとは溜飲が下がりましたけど」

「……………OK。じゃあ落としどころを提示してみようか」

「落としどころ?」

「今後、昨日みたいなことに協力してもらおう場合にはちゃんと事前に相談する」

それは昨日も聞いた。何も言わずに続きを促す。

「それと、業務の一環として協力してもらったから、精神的負担を考慮して給料上乘せするよ。…………あ

ー、三万くらいでいい?」

「……………」

飛び出してきた意外な提案に思わず目をしばたかせる。

「……足りない？」

私の反応に苦笑しながら、彼が問う。黙っていればいくらまで上がるんだろう、などという考えが頭をかすめる。

「いえ、十分です」

首を横に振ると、今度は安堵の表情で彼が笑う。

「じゃあ、悪いけど、改めてよろしくね」

「……はこ」

差し出された手のひらに自分の手を合わせる。仕方ないな、とこちらも笑って。

なんだか、愛人契約でもしたようで複雑な気もするが、業務なら割り切るまでだ。

「……………」

いつもの笑顔に戻った上司を見つめながら。

私は先ほど『徹』から言われた最後の言葉を思い出していた。

『俺が言うのもなんだけど、仲良くしてやって。そいつ——友達少ないから』

#聞き込み調査

「すみません、『徹』さんですか？」

午後八時。郊外の居酒屋で声を掛けたのは、チャコールグレーのスーツに身を包んだ男性。目印の赤いネックストラップにはこの街ではそこそこ名の知れた会社のロゴが入っていた。同じ会社に勤めているはずのもう一人の姿は見えない。

『あかりちゃん』？ 初めまして」

「初めまして。すみません、お時間いただいてしまって」

「構わんよ。君の顔見えてみたかったし。もうひとりとは後から来るから、まあ座って」  
促されるまま、隣へ腰掛けた。カウンターの端っこの席。

木下徹と名乗ったこの男性と連絡を取ったのは、例の電話の翌日のことだった。そろ目で印象に残りやすかったその番号を、自分の携帯で叩く。不審そうな声ながら、八回目のコールで彼は電話に出てくれた。

「突然申し訳ございません」

上司である城ノ内紘について、少し話を聞きたい。そんな突然のお願いに面食らいつつも、彼は私と会

うことを快く了承してくれた。彼は新婚らしく、万が一にも妙な疑いをもたれないように、もうひとりの友人、橋爪直樹も一緒なら、と条件を付けられたが、こちらとしては願ったり叶ったりだった。情報源は多い方がいい。

さらに二日後。指定されたのはこの小さな居酒屋。結局もつひとりはトラブル対応とかで遅刻予定らしいけれど。

事務所へ入って約一ヶ月。ほぼ毎日と一緒に過ごしているけれど、上司には謎が多い。

毎日事務所で寝泊まりしているわけではなさそうだが、どこに住んでいるのか。何故たったひとりで探偵事務所なんていうものをやっているのか。彼に休日があるのかはわからないが、あるとしたらどこで何をしているのか。そして、上司曰くは『多い』、木下徹曰くは『少ない』という『友達』について。

私は何も知らない。知る権利も、知る必要もないことだと言われるかもしれないけれど、それでもなんだか悔しい。

「趣味嗜好とか、なんでもいいです。城ノ内さんについて教えてください」

「んー、俺も直樹も、そんなに知ってるわけじゃないけど」

「おふたりは上司とどういった関係なんですか？」

「高校ん時の同級生だったんだよ。別に、特に仲良くもないただのクラスメイト」

「？ 友達じゃなかったってことですか？」

「そ。あいつに対してはみんなそんな感じ。あいつ、あー、……結構いいトコの子でさ。正直付き合いつらかったんだよね。暗いっていう感じじゃなかったけど、全然笑わないし、近寄りがたいっていうか」

「……………へえ」

意外な過去。今の上司しか知らない自分には、笑わない上司など想像も付かなかった。

「俺も直樹も、高校時代にあいつと話したのなんか数えるくらいじゃないかな」

「じゃあどうして今は……」

「何年前か、たまたま繁華街で会って一緒に飲んだんだ。家出たって噂は聞いてたけど、当然同窓会にも出てこないし、話聞かせろよって。ま、実際は出来上がった俺らが無理矢理拉致って連れてったんだけど。素面ならそんなこと出来なかっただろうな。途中まではすげえ嫌がってる顔だったし」

「途中まで？」

「ん。あいつ酒めちゃうくちや弱いから、ちょっと飲ませたらソッコーで潰れたんだよ。で、介抱してるうちのうち解けた、って経緯。今じゃ誘ったら短い時間だけ付き合ってくれるよ、酒抜きでね」



そこまで話して、彼は視線を上げた。

「おお、お疲れ。なんだ、早かったな」

「お疲れ。っと、君が『あかりちゃん』？」

もつひとりの到着。会釈で回答した。

「話ほとんど終わっちゃったよ」

「まあ、紘に関しちゃ俺らもほとんど知らないからな」

「あかりちゃん、こいつがこの前紘漬した犯人ね」

「もうちよっと飲めるようになってるかと思ってたのになあ」

「あいつは無理だろ。でもまあ、酔わせたから聞けたんだよ、君の話も」

「……私のこと、なんて言ってたんです？」

ウーロンハイの入ったグラスを傾けながら、隣の男はからかうように笑つ。

『面白い子なんだ』って」

「そうそう、そりゃもう楽しそうにさ。徹が嫁のこと話す時そっくり」

橋爪直樹のそんなセリフに、新婚・木下徹が吹き出した。

「今日はありがとうございました。お話、聞けてよかったです」

「いや、大した情報なくてごめんね」

「しかし、あかりちゃん強いね！ 紘と正反対だ」

「いえ、それほどでもないです」

真っ赤になったふたりに見送られながら、ひとり帰路につく。

知りたかったことは何もわからなかった。それどころか、彼らは城ノ内紘が探偵をやっていることすら知らなかった。

それでも、話を聞いてよかった。それは本心だった。

『面白い子なんだ』

頭の中で、実際には聞いていないセリフが、上司の声で再生される。

「……………人の気も知らないで」

零れた独り言は、暗い夜道に吸い込まれて消えた。

井結婚調査

「あかりちゃん、あのさ」

固定電話の受話器を置き、こちらに向き直る上司。

最近やっと私の邪魔をせずに電話をすることを覚えた彼は、苦く笑いながら、

「結婚願望、ないままだよね？」

妙な言い方で、以前と同じ質問を投げかけてきた。

「は？」

「……本当に？」

「はあ。なんなんですか？」

「今から依頼人が来るから同席してほしい。今回はさっという振りとかしなくていいから」

「いいですけど」

今はその辺も業務の一環だ。振りをするのもOKなんだから振りをしなくていいならもちろん断る理由はない。

「厄介な依頼なんですか？」

「いや、結婚調査の依頼」

「結婚調査？」

「結婚前に相手の身上調査とかする人がいるでしょ？ あれ」

「ああ、なるほど。難しいんですか？」

「いや、尾行もないし、情報集めるだけだから僕からすれば比較的簡単。でも依頼人がちょっと苦手だね。一緒に居てほしいけど、多分、残りカスみたいな結婚願望でも持つてるなら同席しない方がいいから」

「まあ、とりあえず問題ありませんよ。じゃあお茶入れて一緒に居ますね」

笑いながら、頷く。

ここまで言われると逆に興味が出てくる。正直、どんな依頼人なのか見てみたかった。

\*

依頼人が出て行って数分。ふたりしてキッチンスペースへ直行し、二時のお茶の準備をする。なんとなくココアを選択し、無言で牛乳を沸かし、無言でカップを用意する。いち早く落ち着きたい。

沈黙を破ったのは、上司の疲れた声。

「……強烈だったでしょ？」

「……はい」

こちらの応答も想像以上に疲れた声になった。

「確かに、結婚願望の残りカスも吹き飛ぶような姑さんですね」

依頼人は五十代の女性、川村洋子。依頼してきたのは、自分の息子が結婚相手として連れてきた女性の身上調査だった。

『うちの子は騙されてるわ。絶対ろくでもない女に決まってるのよ！』

夫人のセリフが、頭の中でこだまする。

「あの絶対的な確信は……何か根拠があるんでしょうか」

「ないだろうね。女の勘云々よりは、単に息子取られて悔しいだけっぽい」

「……過保護っぽいですね」

「息子、僕と同じ年みたいだけど、それが嫌で家出たらしいね。礼儀は重んじる人らしくて、結婚するとなるご挨拶くらいはしなきゃってなるみたい。ほっときゃいいのに、ったく面倒な」

そう言って笑つ。が、本気で面倒らしく、目は笑っていない。

「城ノ内さん、あの人リピーターなんですよね？」

「残念ながら、二回目だね」

「ってことは息子さん、過去二回は結婚駄目になったってことですか？」

「……まあね。さすがに、僕の立場で調査結果を報告しないわけにはいかないし」

思わず、かわいそう、という言葉が浮かぶ。あんな姑の攻撃材料にされるのがわかっていても、個人の過去を洗いざらい調べて提供する。この職業は罪深い。

「……どういうのって、罪悪感とかありません？」

「まあ、まったくないことはないかな。ただ、中絶経験二回のおっすえ浮気がバレてのバツイチとか、結婚詐欺で服役した過去のある人を選ぶ息子に女性を見る目がないのは確かかもね」

「……………」

絶句。なんなんだ、どいつもこいつも。思わず頭を抱えた私に苦笑して、

「さて、息子にとって『二度あることは二度ある』になるか、それとも『三度目の正直』になるか。あかりちゃん、どっちに賭けるっ？」

冗談っぽく、そんなことを言っ上可。

「賭けませんよ、不謹慎な。大体、城ノ内さんもわかってるんじゃないですか？」

「いや、調査はまだだよ。対象者は友達でもないしね。現段階で、答えは僕にもわからない」

ひらりと、先ほど依頼人から受け取った対象者の写真をかざす。

調査対象者の藤田舞。写真の中で笑う彼女は、とても優しく清楚なイメージ。

「負けた方が昼飯一回おごる、とかどう?」

笑いながら、食い下がってくる。

「嫌です。負けたらバカ高い店とか連れて行かれそうだし」

「そんなことしないって。あいにく金には困ってないからね」

「どうやら結果などはどうでもよく、上司は何か変わったことがしたいだけらしい。」

人の人生の掛かった問題でくだらない賭けをすることに抵抗を覚えつつも、しつこいので付き合ってることにする。なら、賭けるのは、——せめて彼の幸せを祈って。

「——三度目の正直のほうで」

「OK。じゃあ、僕は結婚出来ないほうで」

\*

一週間後。

午前十一時。報告書を持った上司に続いて、応接スペースへ入る。

先ほど出したお茶を飲み干して、川村夫人はこちらへ向き直った。

上司は軽く挨拶しつつソファへ軽く腰を下ろし、持っていた書類を目の前へ提示する。

「息子さんのお相手は、息子さんには及びませんが大きめの企業にお勤めの総合職で、家柄も申し分ありません。学生時代の成績も、お仕事のほうも非常に優秀。強いて言うなら学生時代、短期間ですが、友達に誘われたアルバイトで夜のお仕事をされていたことがあるようですね」

学生時代のガールズバー勤務。おそらくそれが唯一、川村夫人の望む情報だった。

「まあー！」

「……………」

目を見開く夫人。怒っている素振りの中に、鬼の首を取ったような喜びが感じられた。

その他の素晴らしい情報を聞き流し、重箱の隅をつつくように叩けるところだけを耳に入れる。それみたことか。お母さんの言った通りじゃないの。そんな声が聞こえるよう。

せっかく、息子が今度こそ素晴らしい女性を見つけて、幸せになろうとしているのに。

——冀姑。



蔑みが顔に出たらしく、気付いた上司に視線で咎められた。

「……………」

うつむいて、悔しさに歯がみする。こちらはただ、依頼のままに情報を提供するだけ。例えそれが誰かの幸せを妨害するとわかっていても。

賭けは、私の負けだ。

「ありがとうございます。振り込みはまた後日」

嬉しそうに、いそいそと鞆に書類をしまつ夫人。ソファから立ち上がる寸前、上司が制止した。

「川村さん、もっ少しお時間よろしいですか？」

「……………」

「ご依頼とは別件になりますが、お耳に入れておきたい情報があります」

「まあ、何かしら」

「息子さんのことです」

「幸彦の？」

「……………」

別件の追加情報？ そんな話は聞いていないし、報告書も作っていない。

上司の様子を窺う。いつもと同じ営業スマイル。

大変申し上げにくいことですが、と前置きをして、上司はその顔から笑みを消した。

「息子さんはお勤めの会社で多額の横領をされています」

「——えっ!？」

川村夫人の素っ頓狂な声。

「で、でも息子は、今も毎日会社に通って——」

息子は家を出ているはずなのに監視でもしているのか、動揺した夫人はそんな言葉で反論した。

「会社側が、横領した金額の弁済を条件に大事にしないことにしたそうです」

先ほどまで嬉しそうだった夫人の顔が、蒼白になっていく。

「その、金額は……?」

「およそ一億二千万」

「………そんな、どうしたら」

息子の結婚調査に躊躇なく二十万を払うくらいだから、ある程度裕福ではあるのだろう。それでも大きな金額に夫人はわなわなと震えていた。

「何もご存じなかったんですね」

「知っていたら止めています！ あの子、なんでそんなこと……！」

「不明です。息子さんのお相手を調査している途中で判明したことであって、それを主として調べていたわけではありませんので」

「……そう、ですよね」

「ちなみに、この話は会社との間で既に終わっています。お金のほつも既に返還済みです」

「えっ!？」

川村夫人が二度目の声を上げる。

「そんなお金……どうやって?」

「補填を申し出たのは、藤田舞さんのご両親です。先ほども申し上げましたように、家柄もよく、裕福でいらっしゃるのです——息子のためなり」と

「——」

血の気のない顔のまま絶句する夫人へ、追い打ちのように上司が笑う。

「余計なことかもしれませんが、息子さんのためにも、あなたがたのためにも、ご結婚は反対なさらない  
ほうがよいのでは？」

魂が抜けたように呆然と出て行く夫人を、営業スマイルで見送った後、

「踏み倒されるかもな」

ボソリと、上司が零す。

「まあ、いいか。二度と来ないだろうし」

「……本当なんですか、あれ」

「ん？」

「横領とかって、……最悪じゃないですか。どっちもどっちどころか、あれじゃ舞さんが」

「ああ、あれね」

私の言葉に、くすりと笑って。

「嘘だよ。川村幸彦は横領なんかしてない。極々普通に会社員やってるぞ」

「………は？」

「軽く調べたのは本当だよ。同じ会社に友達がいるからちょっと情報もらった。真面目で優秀な経理課主任は母親に執着されて困ってるって有名だ。ついでにあの夫人は、近所でも有名。どっという意味でかは想像にお任せするけど?」

「だから、嘘教えたんですか? 信用に関わるんじゃない?」

「僕が依頼されたのは藤田舞の身上調査だけだよ。あの報告書に嘘はない」

キツパリと彼が言う。それは、自分の仕事に自信を持つ者の強い口調だった。

「あかりちゃん。僕は依頼のひとつが完了したから、『もうひとつの依頼』に基づいて行動しただけなんだよ。これ、誰からの依頼かわかる?」

「……まさか」

「そ。母親から逃げたい息子から、ちょっとした情報操作の依頼。ちなみにガールズバーで働いてたことに関しては、川村幸彦も承知してるよ。ふたりの最初の出会いがそこなんだから」

「……………」

言葉が見つからない。ぽかんと口を開けたまま固まっていると、不意に頭に手が置かれた。

「さ、準備して。賭けは俺の負け。昼飯食いに行こう」

笑いながら、上司は脱いだ上着からポケットに財布を移す。

「――」

私は今さら、あの賭けが遠回しすぎるランチのお誘いだったことに気が付いた。

## #秘密

「あかりちゃん、なんにするの？」

タクシーをつかまえてまで連れて行かれたのは繁華街の片隅にあるイタリアンレストラン。

小さめの個室に通され、手渡されたメニューを眺めながら、上司がこちらに尋ねてくる。

「……なんでもいいです」

いつもふたりで過ごしているけれど、向き合って座った経験はあまりない。面接の時を思い出して、何故だか緊張した。

「じゃあ、おすすめのセットにしとこっか」

「はい」

高級店というわけではなさそうだが、サラリーマンが日々の昼食に選ぶほどの価格でもなさそうだ。

上司が注文を済ませて数分、並べられたカトラリーの中に箸を見つけてなんとなくホッとする。口の中が乾いている気がして、出された冷水に口を付けた。

そんなこちらの様子に気付いたのか、彼が不思議そうに見つめてくる。

「なんか、緊張してる？」

「……っ、はっ」

一瞬言葉を詰まらせた私に、なんで、とおかしそつに笑う。

相変わらず子供のような、幼い笑い方。息がしづらい。優しいはずのその目は、真正面から相対すると、やっぱりすべてを見透かしているようで——怖くなる。

「せっかくここまで来たのに、そんなんじゃ味わかんないよ?」

冷水をひとくち含んで、彼が目を細める。

「ま、今日はお客さん来る予定もないし、昼休み長めでいいから、ゆっくりしよ」  
そつ言いながら、携帯に目をやる。

「……………」

視線が外れたからか、金縛りから解放されて、私は彼に聞こえないよう、静かに安堵の息を吐いた。

\*

「ん、なかなかよかったね」

最後の飲み物が運ばれてくると、コーヒーのカップを持ち上げながら、上司が笑いかけてきた。



「はい。「ごちそうさまでした」

こちらでも紅茶のカップに口を付け、その熱さに一旦口を離す。

食事中、私の心中を察してか、極力視線を合わせないようにしてくれたおかげで、料理は落ち着いて味わえた。

「どういたしまして。ま、悔しいかな賭けに負けたのは俺だからね」

「負けるつもりだったくせに」

少なくとも途中からはそのつもりだったはずだ。

くすりと笑い合いながら、いつの間にか彼の一人称が変わっていることに気付く。これが、本当のこの人なんだろうか。観察するような視線を向けると、またふと目があったしまった。

「あかりちゃん」

「……はこ」

「何か、俺に聞きたいことがあるよね」

微笑みをたたえたまま、彼はそう言った。

わずかに冷たくなった視線に、ドキリと心臓が跳ねる。

「いいよ、聞いて。答えるかはわからないけど」

聞いたことがあるセリフ。あの時は答えてくれたけど、今度はどうだろうか。

知りたいけれど、知ってはいけない。そんな気がする。

彼にとって他人が立ち入ってはいけない領域に、踏み込んでしまう気がする。それでも――

「城ノ内さんは、――なんで探偵なんてやってるんですか？」

絞り出すように口にした質問は、私が本当に、一番知りたかったこと。

上司は少し意外そうな顔をして、

「……なんだ。そんなことならわざわざ徹たちなんかに関かなくてもよかったのに」

「っ、知ってたんですね」

「ああ、あいつらが告げ口したわけじゃないよ。その時、居酒屋に俺の友達も居たってだけ」

「……一体何人いるんですか、城ノ内さんの友達って」

舌打ちしそうなこちらの顔に笑って、

「じゃあ、その質問にも答えようか」

一度目を閉じ、小さく頷いた。

「あかりちゃんはさ、小さい頃、将来の夢ってあった？」

「……はい、まあ一応。お菓子屋さんとかそういうんですけど」

「ん。俺はね、五歳の時に探偵になりたいって思ったんだ」

「五歳？」

「ん」

「五歳で探偵って……テレビか何かで見たんですか？」

「いや、五歳の時に誘拐されてね。俺、結構いいトコの子だったから。で、もちろん警察も動いてたけど、助けてくれたのが、親が雇った探偵。交渉人の経験もある人だったみたいだね」

誘拐。それはさすがに想定外だった。絶句するこちらに笑みを向け、彼は続ける。

「その日から、探偵になるのが俺の夢になった」

「……夢」

「残念ながら、俺はIQ180の天才でもないし、怪しげな薬で子供になったわけでもなかったからね。その分、夢を夢で終わらせない程度の努力はしたつもり。おかげで今の俺がある」

これでひとつめの質問の答えになるかな、と。

「……五歳の頃から、ずっと、探偵になるつもりだった?」

「まさか。当時は本気だったけどね。幼い間ならともかく、成長することに自分の立場はわかってくる。腐ってもひとり息子だったから家継ぐとか色々ね。実際叶えられるとは思ってなかったよ」

そう言って苦笑する顔は、どこか寂しそうで、そしてどこか冷めた色をしていた。

「それでも諦めきれなくて、悪あがきは続けてきた」

「悪あがき?」

「あかりちゃん、探偵に必要な能力ってなんだと思う?」

「……っと、観察力とか推理力? 情報収集能力、あとは追跡能力とかですか? 城ノ内さんは情報収集能力に特化してますよね」

「うん。『情報を制する者は世界を制す』が俺の信条だからね。『探偵業の業務の適正化に関する法律』ってわかる?」

「……。いや、わからないです」

首を振ると、彼は、不勉強だなあ、と肩をすくめた。

「平成十八年六月に出来た法律だね。第六条、探偵業務の実施の原則。『探偵業者及び探偵業者の業務に従事する者は、探偵業務を行うに当たっては、この法律により他の法令において禁止又は制限されている

行為を行うことができることとなるものではないことに留意するとともに、人の生活の平穩を害する等個人の権利利益を侵害することがないようにしなければならない』『

「……………」

「つまり、探偵業として尾行調査や聞き込み調査するのは法的に認められてるけど、対象者に気付かれれば罪になるってこと。なら、尾行の出来ない俺は情報を得るためにどうするか」

「……それが、他人を使うことですか？」

「間違っではないけど、正解ともちよつと違つかな。探偵業法では探偵業者以外への委託は禁じられてるっ」

「……え？　じゃあ」

「聞き込みに関しては知っていることを教えてもらってるだけだし、尾行もただ、GPSで、たまたまその場にいる友達に連絡を取って、写真を撮ってもらってるだけ。テキストのほうは実際に尾行してるようにでっち上げてるけどね」

思わず顔を歪める。その手法の是非はともかく、詭弁としか思えなかった。

「……まさか。不可能です。そんなに都合よくいくわけじゃないじゃないですか」

「まあ、そう思っただろうね。実際上手くないかないこともないわけじゃないし」

「信じられません。大体、そんなことやろうとしたら、どんな人数——」

そこまで言って、彼と目があう。静かに、ただ、笑っている上司。

「——それが、悪あがき？」

「だから、友達を作ったんだ。五歳の時から。最初はひとつの建物にひとり。ひとつのフロアにひとり。ひとつの会社にひとり。ひとつの部署にひとり。毎日最低ひとりずつ友達を増やしていった。情報は力になる。それは探偵じゃなくても同じだよ。そうやって、——城ノ内紘は力を入れた」

「——」

言葉を失う。ソワリと、冷たいものが背中を駆け抜けた。

優しい笑顔のまま語られるそれは、紛れもなく、彼の執念の物語。

「もつひとつの質問に答えるよ、あかりちゃん」

カップの中身を飲み干して静かにソーサーへ返すと、彼は固まったままのこちらの表情に苦笑する。

「この街の人口は約十万人。その十分の一が俺の『友達』なんだよ」

\*

「道ゆく人の十人にひとりが情報をくれるなら、ある程度の調査は可能だと思わない？」

そんな言葉で話を締めくくって、彼は片隅に置かれた伝票を手を取った。

「……帰ろっか。紅茶、冷めてるからもう飲めるでしょ？」

そのセリフでやっと、カップの取っ手を持ったままだったことに気が付く。

「……はい」

口を付けると、言われたとおり、私でも飲める温度になっていた。

そのまま一気に飲み干して、椅子から立ち上がる。

「ありがとうございます」

「ん。満足したならよかった」

こちらへ笑いかけた彼のその言葉は、きつと二重の意味を持っている。

『聞きたいことが聞けたなら、もう探らないでね』

要するに、拒絶に近い。彼から直接話を聞いたことで、逆に彼の距離は遠くなってしまった。

それを辛く思う必要はないはずなのに、胸のどこかが痛む。

もしかしたら、私は彼が好きなのだろうか。恋愛感情かどうかはわからないけれど。とにかく、自分が今の状況を気に入っているのは確かだ。失わずにすむならそれに越したことはない。

「……………」

大通りまでの道。並んで歩きながら、ふと隣の彼を見上げる。

視線に気付いた彼がこちらを向く前に、慌てて顔の向きを前に戻す。

「城内さん」

「ん?」

「もうひとつ、質問していいですか?」

「いいよ。答えるかはわからないけど」

彼はまた、いつものセリフを口にする。結局、いつも答えてくれるけれど。

「家を出たって聞きました。それって、夢を叶えるためってことですか?」

「いや、あー……、家を出たのは別の理由」

「別?」

口に出してから、失言に気付く。

木下徹も橋爪直樹も、実家については話したからない、と言っていた。



一瞬、間をおいた後、苦虫を噛みつぶしたような顔で、彼は答えてくれた。

「……恥ずかしながら、五年前とある事情で親と大喧嘩してそのまま家出。まあ、そのきっかけがなきやこうやって探偵することもなかっただろうし、よかったのかもね」

——ああ、そうか。

いつかの記憶が蘇る。息子を捜してほしいという吉岡夫人へ向けた、あの冷たい表情。

あれは吉岡夫人へ向けたものではなくて、彼女を通り越して自分の親へ向けたものだったのか。

タクシーはすんなり捕まった。

深呼吸をひとつ。

切り替えて、通常運転に戻ろう。今日もまだ仕事が残っているんだから。

## #追跡調査

真っ白な丸襟ブラウスにチェックのプリーツスカート。胸元にはエンジのリボンタイ。トイレの個室から出てきた自分を大きな鏡が迎え、

——ぐえ。

童顔なのは自覚していたが、あまりの違和感のなさに、自分で顔をゆがめた。

最後の仕上げに、やたらとポリユミーなテールウィッグ。

「……さて」

午後九時四十五分。対象者の追跡を開始する。

バスと電車を乗り継いで辿りついたのは繁華街。近くに住んでいるのか、飲み会にでも顔を出すのか。移動中も適度に人の多い状態で助かった。多すぎても補足するのが大変だが、少なければ断念するところだった。

二度目の正直。……まあ、見失っても構わない。また最初からやり直すだけなんだから。

そもそも普通尾行はふたり以上ひと組。ひとりで尾行って段階で、多分に問題があるわけで。

「あー、うん。そうなんだよね」

誰とも繋がっていない携帯で、誰かと話している振りをしながら、あくまで自然に、対象者を追っ。ゆっくりと、それでいて軽やかに、対象者は歩を進める。

繁華街を通り抜け、少し薄暗い道を歩くと、今度はホテル街に出る。

「……………」

金曜日というのもあってか、人気は少くない。ネオンのきらびやかな建物へ、ひと組、ふた組と吸い込まれていく。対象者を尾行するにあたって、この通りが閑散としていないのは有り難かった。ただ、この格好は間違いだったかもしれない、と後悔し始める。ひと組のカップルに、ちらりと流し見られて、思わずうつむいてしまった。

「……………」

顔を上げるまで、たった数秒。それでもそれは確実な落ち度。

——見失った……………！

無意識に、早足になる。落ち着け。この付近の分かれ道はそんなに多くない。

最後に後ろ姿を確認した地点から一番近い路地へ、足を向ける。

——……居ない。

誰もいない路地を、薄暗い街灯が照らしていた。自分の失敗を確認すると、立ち止まったまま、目を閉じる。身体のごとくかから、空気が抜けていくような感覚。深呼吸のような、静かで長いため息が口をつく。

「——はい。そこまで」

——唐突に。

ポンと、肩に手が置かれる。

「——っー」

振り返った私を見下ろして、

「二回目の尾行、ご苦勞様。あかりちゃん」

対象者、城ノ内紘はくすりと笑つ。

「でも、この場所にその格好は家出少女みたいでいただけないね。危ない奴に連れ込まれたらどうするの？  
いつもと変わらない優しい口調で、説教してみたセリフ。本当に子供に注意するみたいに。

「思はず思はずに、思わず目をそらす。」

——最悪だ。

言い訳は思いつかない。いや、思いついたところで無駄だろう。

『二回目の尾行、ご苦労様』

彼はどこまで知っている？ ただ知らない振りをしていただけで、すべてお見通しだったんじゃないのか。

——それなら、それで構わない。

目的のひとつ——『彼の自宅を突き止めること』は出来なくとも、

私の一番の目的は、絶対に達成してみせる——

「君も尾行は下手なんだね。宮原調査事務所の元調査員、園田あかりさん」

彼はもつ、知っていることを隠さない。

「演技は上手なのにね。もったいないなあ」

「……最初からわかってて私を雇ったんですか？」

彼はいつもと同じようにこちらへ笑いかける。

「買いかぶりだね。さすがによその調査員ってのは最初はわからなかった。雇った理由は、君の履歴書が、ほとんど全部嘘だったからだよ」

「——はは」

無意識に、乾いた笑いが漏れた。何が『信頼出来る人間と判断しました』だ。彼は私をこれっぽっちも信頼なんてしていない。結局、泳がされてただけじゃないか。

「職歴も住んでる家もわかった。けど、どうしてもわからなかったことがある」

「……わからない？ へえ」

嘲笑する。それが自身に向けたものなのか、それとも目の前の彼に向けたもののかは自分でもわからなかった。

「教えて、あかりちゃん。——依頼人は誰？」

まっすぐにこちらを見据えて、笑みの消えたその顔で、彼が問う。

「……………」

瞬間、湧き上がったその感情を噛み殺して、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「推理、してみたらいかがですか？ 探偵なんだから慣れてるでしょう？」

投げかけた言葉は、苛立ちを隠しきれていなかった。

「推理ってのは不足してる情報を補うためにするものだよ。あいにく俺には縁がなかったから、慣れてはいないね」

「——なら今、経験を積んでみたらいかがですか」

路地の低い塀へ腰掛けて、目を細める。

「私が、採点してあげますから」

「……っ」

今度は彼が言葉を詰まらせる。何度か視線を泳がせると、ゆっくりと目を閉じた。

わからなかった、と彼は言った。

膨大な情報を集めることの出来る彼は、その分証拋主義だ。確証のないものは信用しない。

今回の件で、確信となるものが掴めなかったのは、彼のネットワークから意図的に外されたところがあるからだ。

木下徹と橋爪直樹は、現在の彼のことを——城ノ内紘のことをほとんど知らなかった。あの人たちはネ

ットワークには組み込まれていないのだ。

五歳の時から行動を起こしてきた彼が、一番効率がいいはずの学校で『友達』を作らなかった。その理由は、彼の本当の姓にある。『結構いいトコの子』——実際はそれどころじゃない。彼が持っていたのは、誰もが顔色を変えるこの街一番の権力者の名前。

彼の目的にとっては重くて邪魔でしかない苗字を隠し、母親の旧姓を借りて『城ノ内紘』は誕生した。二十年近く二つの名前を使い分けていた彼は、家を出ると同時に、本来の自分とそれに直接関わるものすべてを、あっさり切り捨てた。

今回の答えは、その時欠落した部分にある。だからこそ、彼には『わからない』のだ。

静かに、彼が目を開く。微笑みを浮かべた口元とは対照的に、その視線は冷たい。

大きく一度、ため息をついて、彼は回答を口にした。

「……じゃあ、回答するね。依頼人はおそらく、穂積修司。俺の、父親」

「理由は？」

「この街で俺のネットワークに引っかかる人間、そのうえ人を雇ってまで俺のことを調べようとする人間は穂積の家以外に考えられない。あまり考えたくはないし今さらな気もするけど、連れ戻すため、と



かそういうことかな」

「……………」

彼の回答を噛みしめるように、一度目を閉じる。またひとつ、大きく静かな深呼吸。それから扉から降りてスカートを軽くはたき、ゆっくりと彼に近づいた。

「あかりちゃん、解答は？」

彼はどこか寂しげにこちらを見下ろす。

愛すべき裏切り者に対するその視線に、にっこりと笑ってやる。

パン、と乾いた音が辺りに響いた。

「不正解です」

反射的に頬を抑えて、呆気にとられている彼をまっすぐに見上げる。

「依頼人なんて居ません。強いて言うなら、私本人です」

「……………」

「自己紹介が遅れましたね。初めまして、穂積紘さん」

きよとんとした顔。それに向けた目的達成の笑顔は、我ながら会心の出来だった。

「私は西園あかり。あなたに逃げられた——元婚約者です」

## #逃避行

「ちなみに、あなたのご両親はとくにあなたのことを見限ってらっしゃいますのでご心配なく」  
付け加えた言葉には、反応は返ってこなかった。

「穂積もろとも西園まで切り捨てたからわからなかったんですよ。調査員でストップしないでもっと遊んで素性調べてたら……さすがに西園姓だっということがわかれば気付けたでしょうに」

フリーズしたままの彼へ、抱擁でも求めるかのように、ゆっくりと両手を伸ばす。

「親が勝手に決めた結婚話が立ち消えになったことに関しては感謝してるよ。——でもな!!」  
襟元を掴んで、自分の顔の前へ引き寄せる。

「勝手にいきなり失踪しやがって、おかげで私は十八にして行けず後家扱いだ！ 成績優秀、おしとやかに完璧なお嬢様演じてきたのに、一夜にして周りがかわいそつなもの見る目に変わる屈辱がわかるか!？」  
締め付けられる苦しさに我に返ったのか、彼がやっと反応を返す。

「ちょっと、あかりちゃん？ とりあえず落ち着いてっ」

「落ち着けるわけじゃないでしょう!？」 自分の家ですら居場所なくなって、私がどんな思いで生きてきたか……っ。文句くらい言わせろよー」

五年前。父親から、おまえの結婚決めてきた、なんて寝耳に水の事後報告を受けた翌日、顔も知らない婚約者、穂積紘は行方をくらました。

もともと娘の私を家の繁栄のための道具としか見ていなかった父親。役に立たないとわかれば、扱いは地に落ちた。自分の意思で実家を切り捨てた彼とは違い、——私は切り捨てられたのだ。

喚きながら、自分の中で何かが決壊するのを感じていた。

感情がコントロール出来ない。

せめて涙だけは零すまいと、必死に堪える。この男の前で、泣いてたまるか——

「わかったわかった！ 場所変えて聞くから！」

「時間稼いでごまかす気満々だろ!? もうやなんだよ振り回されるの!!」

「だから落ち着けて……！」

一瞬、苛立ったようにそつ言つと。

彼は少し強引に、その腕で覆い隠すように、私の視界を遮った。

「……………」

驚きで、言葉が詰まる。

「……………悪かった」

耳元で、低い声が響く。

「君に対してもっと配慮するべきだったのは確かだ。けど、頼むからちょっと落ち着いて」  
優しい口調。けれど、いつものような余裕は感じられなかった。

視界を奪われた動物としての本能か、そう強く抑えられているわけではないのに、身動きが取れなくなる。襟を掴む手からも、力が抜けていった。

——ああ、そうか。

頭が冷えていく中、不意に気付く。

つまり私は、彼が失踪したことに怒っていたわけではなくて、  
ただ、彼がうらやましかっただけなんだ、と。

「……………」

そうしていたのは時間にしてほんの数秒。そっと、後頭部に触れた手のひらが、慰めるようにこく軽く髪を撫でる。

「落ち着いた？」

「……はい」

頷くと同時、緩慢な束縛から解放されて視界が開ける。

まず目に映ったのは、目の前の彼の引きつった顔。その余裕のない表情に違和感を覚える暇もなく、襟から離れた手を掴まれた。

「逃げるよ」

「……は？」

「さっき通った人に警察呼ばれたっばい」

「——えっ」

少し離れたところから、ふたつの黒い影が近づいてきていた。

ラブホテルが立ち並ぶこの通りの片隅で、スーツ姿の男に尋常じゃない様子で詰め寄る女子高生。それは残念ながら、ただの痴話喧嘩には見えなかったらしい。

手を引かれ、転びそうになりながら、走る。

「ったく、よりにもよってなんでそんな変装したんだよー！」

「……るっさいな、これが一番違和感なかったんですよ！ てか城ノ内さん、警察にも『友達』いるんで

しょ!? どうにかしてもらってくださいよ!!」

『友達』に買春疑われるとか御免なんだよ! あかりちゃんが職質で先生と生徒ブレイだとか言ってくれんなら別だけど!」

「——っっ! 絶対対嫌です!!」

#願い ~ Epilogue

「はー」

公園のベンチに腰掛けてうなだれる私へ差し出されたのは、今しがた自販機から取り出されたペットボトルのスポーツドリンク。

「ありがとうございます」

受け取りながら、口にするお礼の言葉は途切れ途切れになった。息が上がっている。自分より体力なさそうな目の前の男が案外けろっとして、なんだか悔しい。

受け取ったボトルをそのまま頬に当てる。表面の水滴が、汗と混じって頬を伝った。

どれくらい走ったろう。繁華街の喧噪は遠ざかり、この静かな公園で聞こえるのは虫の声と誘蛾灯の音くらい。

隣に腰掛けた彼が、自分の分のボトルをあおる。

「あー……、話聞けど、どうせなら食事でもする？」

他人の目のあるところなら理性的に話が出来んじゃないか、という希望的観測が垣間見えた。怒鳴られるのは苦手らしい。



「——」

無意識に、息が漏れる。唐突に笑い始めた私に、彼がボトルを口から離してこちらを見る。笑いかけながら、首を横に振った。

「……いいです。なんか、気が済みました。一発殴って言いたいこと言ったし。それが、私の目的だったから」

彼は黙って、私の話を聞いていた。

「城ノ内さん。私ね、あなたがうらやましかったんです。あの時、私にはなんの力もなくて、何も、逃げることもすら出来なかったから」

不思議と、気分は晴れていた。

「……今から、わがままなことを言いますね。仕方なかったってわかっています。私があなたでも、同じ事をしたかもしれない。でも」

そう、これが、自分でも知らなかった、理不尽で他力本願な私の本音——

「五年前、一緒に連れて行ってほしかった」

馬鹿げている。そう思いながら、精一杯、笑って言った。

それが実際出来たかというと、もちろん無理だ。私たちはお互いの顔も知らず、彼に至っては西園の娘

というだけでこちらの名前すら知らなかったんだから。

「うめん」

反論もなく、ただ短く謝るその声には、罪悪感が満ちていた。

「そう簡単に償える事じゃないのはわかってる。君はどうしたい？」

その質問に、ベンチから立ち上がった、一度背伸びをする。

「別に、何も。今の状況も、今の自分も気に入ってるんです。だから、」

振り返って、ゆっくりりと、彼の前に立つ。

「——もう二度と、居なくならないでください」

その言葉は静かな公園に、微かに響いた。

口にしたのは、心からの願い。

だって、彼の居るところこそが、私がやっと手に入れた、自分の居場所なんだから。

数秒の沈黙の後、小さく息を吐き出し、降参、というように両手を上げて。

「……わかった」

今のところそんな予定はないけどね、と付け加えた彼は、やっと、いつもの顔で笑った。

「約束するよ、俺は居なくなるらない。また君を怒らせて、夜逃げでもない限りはね」

そんなおどけたセリフに、こちらもくすりと笑って。

「構いませんよ。私も五年前の私とは違います」

「ん?」

「見習いみたいなもんとはいえ、これでも一年探偵やってたんですよ? 何をしても、最悪穂積と西園の

名前を使ってでも、必ず見つけ出して連れ戻します」

「……っ」

これ以上ないくらい強気な口調に、言葉を詰まらせる彼へ。

一呼吸置いて、とびっきりの笑顔を向けてやる。

「——次は、一発で済むと思わないでくださいな」

一瞬、見開かれる目。数回の瞬きの後、

「——ふっ」

吹き出しながら顔を背け、腹を抱えてひとしきり笑うと、

「結婚しなくて正解だ。絶対尻に敷かれてた」

顔を上げた彼は、そんな失礼な言葉を口にした。

公園の時計が十一時半を指す。

「帰ろう。駅まで送るよ」

それとも、うち泊まってく？　なんていう冗談を聞き流し、帰路につく。

そんな冗談が出てくるということは彼の家はあの近くなんだろう。いずれ突き止めてやる、と心に誓う。  
尾行ごっこは続行だ。いつか、家の前で待ち伏せて驚かせてやる。

「改めて、末永くよろしくね。あかりちゃん」

駅の改札前で差し出された手。彼との二度目の握手は、心からの笑顔とともに。

「はっ」

\*

新たな目標を胸に秘め、私の日常は続いていく。

薄暗い事務所で彼のカーディガンに手を通し、彼の笑顔に時には笑い、時には怒り、たまに昼食の賭けをして。

「はい、城ノ内探偵事務所です」

城ノ内探偵事務所は、今日も悩みを抱えた依頼人を受け付ける。



SiestaWeb は関西を中心に小説・漫画から  
オリジナルキャラクター「とかげまん」のグッズまで節操なく  
のんびり気の向くままに活動しております。

## 城ノ内探偵事務所 [Sample]

配信開始日 : 2016年5月5日

発行元 : SiestaWeb

発行責任者 : 桂瀬 衣緒

連絡先 : [webmaster@siestaweb.net](mailto:webmaster@siestaweb.net)  
<http://www.siestaweb.net/>